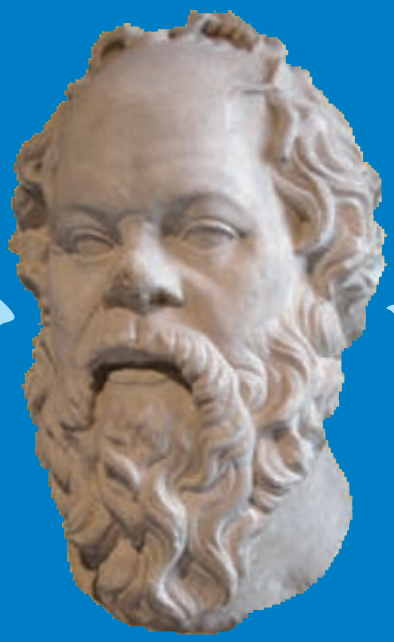
教養教育推進センター広報誌

特集：平成 20 年度第 1 回ＦＤ研究会報告

高等学校教育と大学教育の現状とそのあり方

ディアロゴス



ギリシャ語のΔΙΑΛΟΓΟΣは「対話」という意味です。英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など、西洋近代諸語も、それを音写して取り入れています。「対話」は「真理への道」として、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの哲学の方法とされ、その弟子プラトンの著作の形式「対話編」となって有名となった言葉です。現代はその「真理への道」としての対話ばかりか、一般用法としての「相互理解の道」としての対話まで弱くなり、もっとも強く復活が望まれるものと言えます。

第14号

国立大学法人 岐阜大学

2009

目　次

学長挨拶　1
実施要項　2
日程等及びタイムスケジュール　3
○提　題「岐阜大学の教養教育の現状」
　提題者　岐阜大学教養教育推進センター
　　副センター長　　小澤　克彦　4
○第一部
　【基調講演】
　　岐阜大学教育学部・教職大学院　教授　　小山　　徹　氏
　　（元岐阜県教育委員会・教育次長）
　　講演題目「高等学校の社会科（地理歴史科・公民科）教育
　　ー特に地理を中心としてー」　8
○第二部
　【テーマ討論（高等学校の指導要領、履修形態などを知る）】
　　「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」
　　元大垣北高等学校教諭（歴史）　所　　史隆　氏　26
　　岐阜県教育委員会教育研修課　課長補佐　　奥村　哲也　氏　37
アンケート集計結果　47
あとがき　53

学長挨拶

岐阜大学学長　　森　　秀樹

本日はご苦労さまです。

平成20年度の第1回教養教育推進センターのＦＤ研究会ということで、御紹介がありましたように、人文・社会系の内容を今回のテーマとしております。本日は、小山先生、所先生、奥村先生に来ていただきました。現場のいろいろなお話を聞かせていただけることをありがたいと思います。

従来から、「教養教育は大事である」ということを、嫌というほど聞いておりますが、我々の意識の中には旧制高校があったときの教育のイメージが残っております。考えてみますと、我が国においては、明治維新から第2次世界大戦が始まるまでの発展途上の状態のときは、教育というのが一番やりやすかったのではないかと思います。子供たちの目は輝いておりましたし、何とか現状を打破して、のし上がろうというようなものが大人にも子供にもあったように思います。今日のように発展があるところまで行ってしまい、満ち足りた世の中においては、子供たちにモチベーションを惹起し、教育するということが、大学においても、高等学校においても、小学校、中学校においても、難しいことであると思っております。資源なき日本のような国においては、教育というのが最初にして最後の一番の砦であると言われております。東京大学の場合は教養学部まで創ったわけで、他の多くの大学が教養部を廃止したときにも生き残っています。本学も含め他の大学では、教養教育を教養部なしでスタートして、今日まで試行錯誤しながら実施しているわけであります。

本学の場合は、教養教育推進センターが中心になり、多くの先生に関与していただいております。第二期中期計画を作るに当たり、この教養教育の問題に関しましては、役員会でも議論をしておりますが、大学の教養教育を考える場合に、関連する高等学校との教育連携というのが非常に大事であると考えます。本日、教育委員会や、高等学校の現場で教えられている先生からお話をお聞きすることは、非常に有意義であると思います。

本学は、今年度から教職大学院がスタートしていますが、それだけではなく、本学は教員免許更新制度に対しても大学の教員が積極的に関与し、岐阜モデルと申しますか、教育に積極的であるとの高い評価を受けることができる教育体系を目指しております。しかしながら、現実には非常に難しい問題がございます。

この集中的なＦＤ研究会において、大学の教養教育がどうあると良いのかをご指摘いただき勉強したいと思っております。4時までのスケジュールでございますが、実りの多い内容になると信じておりますので、よろしくお願いいたします。

平成 20 年度

第 1 回岐阜大学教養教育推進センターＦＤ研究会

実施要項

1．テ　ー　マ：『高等学校教育と大学教育の現状とそのあり方』

2．目　　的：近年、岐阜大学に入学してくる学生の国語及び社会への理解、知識の不足が見られ、大学教育で学生に求める知識・教養と学生が持つ知識・教養とのギャップが目立つようになり、授業を進める上で大きな問題となっている。

　この改善のためには、大学側が現在の高等学校教育の実情（指導要領の変更と内容、履修のあり方、授業内容とそのレベルなど）をよく理解することがまず何よりも必要ではないかと考える。

　全学共通教育及び文系の専門教育について、より一層の充実を図るため、高等学校教育の現状を理解するための一助とすることを目的とする。

3．日　　時：平成 20 年 8 月 27 日（水）13 時 00 分～ 16 時 00 分

4．会　　場：全学共通教育講義棟 1 階　105 教室

5．主　　催：岐阜大学教養教育推進センター
　共　　催：教育学部、地域科学部

6．受講対象者：本学教職員

◆プログラム

提　題
　『岐阜大学の教養教育の現状』
　　提題者　岐阜大学教養教育推進センター
　　副センター長　小　澤　克　彦

第一部
【基調講演】
　岐阜大学教育学部・教職大学院　教授
　（元岐阜県教育委員会・教育次長）　小　山　　徹　氏
　　講演題目『高等学校の社会科教育』
　　※質　疑　応　答

第二部
【テーマ討論】
　『高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの』
　元大垣北高等学校教諭（歴史）　所　　史　隆　氏
　岐阜県教育委員会教育研修課　課長補佐　奥　村　哲　也　氏
　　※質　疑　応　答

平成 20 年度

第 1 回岐阜大学教養教育推進センターＦＤ研究会

日程等及びタイムスケジュール

・日　時　　平成 20 年 8 月 27 日（水）13 時 00 分～ 16 時 00 分
・会　場　　全学共通教育講義棟 1 階　105 教室
・主　催　　岐阜大学教養教育推進センター
　共　催　　教育学部、地域科学部

○司会・進行：中川　副センター長

13：00	開　　会 学　長　挨　拶
13：10	提　題『岐阜大学の教養教育の現状』 提題者　岐阜大学教養教育推進センター 副センター長　小　澤　克　彦
13：25	第一部【基調講演】 岐阜大学教育学部・教職大学院　教授 （元岐阜県教育委員会・教育次長）　小　山　　徹　氏 講演題目『高等学校の社会科教育』 ※　質　疑　応　答
14：25	第一部終了
14：25	第二部【テーマ討論】（高等学校の指導要領，履修形態などを知る。） 『高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの』 元大垣北高等学校（歴史）　所　　史　隆　氏 岐阜県教育委員会 教育研修課　課長補佐　奥　村　哲　也　氏 ※　質　疑　応　答
15：50	第二部終了
15：50	教養教育推進センター　小澤　副センター長　挨　拶
16：00	閉会

提　題

岐阜大学の教養教育の現状

岐阜大学教養教育推進センター
副センター長　小　澤　克　彦

教養教育推進センターの小澤です。

きょうのＦＤの趣旨及び問題点を初めに説明させていただいて、それに基づいてお三方の先生方からお話を聞くという、そうした計画になっております。

趣旨ですが、お手元の冊子の最初の方につけておきました。きょうは特に人文・社会系の授業をめぐってということで、問題点は、私たちが開いている大学での授業のレベルないし内容と、学生の意欲・能力・知識量のギャップということです。この問題は、当然以前から問題になっていたことで、特にこれが顕著であった自然系において、去年ＦＤをさせていただきました。ただ、当然これは自然系の問題だけではなくて、人文･社会系でも見られるということで、その続編として今回企画させていただいたものです。

私たちが今回勉強しようとしている内容は、高校教育における国語や社会系科目の実情を把握するということにあります。つまり、指導要領のあり方はどうなっているのだろう、あるいは教科書のあり方はどうなのだろう､実際の高校のカリキュラムと履修のあり方はどうなのか、あるいは入試とのかかわりはどうなっているのか、授業のあり方、あるいは高校生の実情、大学に対する要望といったことをお三方からお話し願おうと思っております。

実際、授業をやっていてあまり問題はないといった授業も実際にありますが、多くの教員から一部の学生がどうしてもついてこれない、あるいは大人数のクラスだとかなりの数の学生に大きな問題が見られるというようなことが指摘されております。

今回のＦＤの目的ですけれども、これは前回も言っておきましたけれど、大学としての講義のあり方を学生の学力の向上に向けてどう構築していくかにあります。つまり、時にちょっと誤解があるようなのですが、学生にすり合わせろとか、授業のレベルを落とせとかという要求を私たちはしているものではありません。むしろ逆に、レベルの高い授業を設定していきたいと考えています。そのために、レベルが低いとみなさざるを得ない学生の意欲や知識量のアップということを考えていかなければならないと考えているものですので、まずそこのところをお含みおきください。

そして、具体的な問題を８点にわたって整理しておきました。ここが今日の大きなテーマになるところですけれども、これはこの会場の先生方も常日ごろ感じておられることだと思います。大事なことですので、紹介させていただきます。

１番目が、学生の日本語力の低下ということで、これは授業評価のアンケートにおいて、先生方から非常に多くの指摘がなされております。例えば、文章が話し言葉であって稚拙であるとか、漢字の間違いが多過ぎるとか、しかも本当に基本的な漢字まで間違えてくるといった指摘があります。或いはレポートや答案の字が粗雑過ぎるとか、何を書きたいのか論旨が明確でないというような声もあります。また、レポート作成力の低下については、レポートということを学生は概念として知らないのではないだろうかとか、或いは主観的な感想を書き連ねているだけではないかとか、論理的・普遍的に筋道立てた文章が書けないということも言われています。実際にかなり多いのですが、データや資料に書かれていることを並べるだけで、自分の思考が全くないというようなレポート、こういったものが非常に多いということが言われています。その要因として先生方から指摘されていることは、まず社会的な国語力の低下があるのではないか、つまり、社会的に活字離れがあり、当然書籍離れもあり、更に機械的な影響、例

えばパソコンとか携帯ですが、その発達に伴い言語環境が劣化しているということが想定されています。日常的に文章を手で書く習慣が少なくなり、文章力が失われてきたということ、或いは、感覚的な表現の悪戯な称揚、つまり、何か感覚的な表現を社会全体が悪戯に褒めたたえるというか、そういったものが良いとするような風潮があるということも言われています。一方では、「日本語の乱れ」ということが言われているけれど、その乱れを社会が非常に安易に容認しているのではないか、というようなことが指摘されてきた問題でした。

社会系では、地理なら地理だけ、日本史なら日本史だけしか学んでいないという学生が非常に多くて、他の分野には全くと言っていいほどの基本的な知識が欠落していると指摘されています。また、地理や歴史を学んできたという学生においても、地理を一つの空間、或いは歴史を一つの流れとして捕えることができないということもあります。つまり、一つ一つの事象をぶち切れにしか捕えることができないということです。例えば歴史で言っても、事象の年号は言えたとしても、事象間の空間的・時間的関係といったものには全く意識がない、つまり、地理の空間的関係や歴史の時間的流れといったものについて、そういう発想すらない学生がいるわけです。これは、社会分野にかかわっての社会的な要因としては、本来切り離して考えることができない一つの社会事象を、地理、歴史、政治、経済、文化、倫理といった具合に、あたかも異なったジャンルであるかのごとくに切り離してしまっている日本の教育というか、学会もそうかもしれませんけれども、こういった社会のあり方が問題ではないかとも言えます。

そして、学校教育制度の問題として、全体的に日本の教育において国語教育の軽視があるのではないかという声もあります。こういったことにもお三方の先生に答えていただきたいと思っているわけです。更に社会系については、各分野の一つだけしか履修しなくても卒業できる制度になっているということも問題です。これは自然科学系の方でも出てきた問題でした。実質的にたった一つだけしか履修していなくても卒業できてしまうということです。また、指導要領や教科書自体が一つの空間、一つの流れとして教えるというぐあいにできていないと考えられます。あるいは社会事象の見方として、本質的な自分の目で見、自分の耳で聞き、自分で感じ取るといったことが軽視されているのではないかと言えます。これは自然科学系のところでも出ていましたが、実験というものが激減していたという事実があったわけです。同じようなことがここでもあるのではないだろうかということです。一言で言えば、ただ教科書的な知識だけが問題にされているのではないかということです。

そして最後に、入試の出題形式や内容が問題になります。大学自体、自分で自分の首を絞めているのではないだろうか、それに伴って、高校側の方も同じような出題形式になっているのではないだろうかといった、以上の点が今日の問題になります。

無論この問題には、教養教育推進センターも以前から気がついていて、対応・対策を練ってきました。国語、社会系ともに多様な授業を設定しようということで、関係教員に総動員してもらっております。人文・社会系の、あるいは国語系の先生は、全員が毎年開講するというような状況に現在はなっております。

そして日本語力については、とりあえず日本語に興味･関心を持ってもらおうということで、全学共通教育紹介コーナーに「国語力クイズ」というものを数回にわたって掲示してきました。結構学生はこれを見て、いろいろと友達同士でワイワイやっておりました。ということで、今後も継続していきたいと考えております。レポートの作成については、先生方もご存じのように、「レポートの書き方」という小冊子をつくって配布しておきました。社会系については、現在ですが､「これだけは知っておきたい基本の知識」というような小冊子のシリーズをつくっていこうかと、今検討に入ってきております。こんなぐあいに一応の対策はしてきました。

さらに、人文・社会系の先生方が現状をどのようにとらえているかということで、アンケートをとらせていただきました。それが､本日配付しましたこの青い表紙になっている小冊子で、ここには全部の結果を出してあります。この結果、非常におもしろいさまざまな意見がありま

すので、ぜひお読みいただきたいと思うのですが、簡略にそのアンケートをまとめておきました。

人文・社会系とも、受講人数の適当さということに関して、50 名程度が適切である。その理由は、きめ細かい授業がしやすい。つまり、基本的な知識がないという場合もそれを補いながらやっていける、その人数が大体 50 人ぐらいだと、こういうような回答になっております。

学生への対応は、この冊子の中にたくさん書かれておりまして、多くの先生たちがこれまで多大の努力・工夫をしてきていることが読み取れます。

そして、現在、教養教育推進センターでは、人文系も社会系も分野ごとに分けて学生への対応をしているわけですが、その分け方についてどのように考えられるかというようなことに関しては、人文系も社会系も、現在の分野の分け方でいいであろうと判断しています。ただ、双方ともに、境界や融合領域のようなものを設置するといいという声が出てきております。

新たに設置すべき科目について、人文系の方では、自国の伝統文化にかかわる授業の増大がかなり指摘されておりました。無論現在でも行っておりますが、自国文化の重視という面から弱いと言えるのかもしれません。ただし、これは教員の数の問題になります。そんなにたくさんの人数はおりませんので、日本思想、日本宗教、日本民族の倫理や自国の伝統文化にかかわるものを倍増というには、やはり教員の数をふやさないとできないだろうというところはあります。

そして、学生の基礎知識の欠落の部分ですが、これは先ほど問題点のところで指摘しておきましたけれども、文章表現、歴史的な知識が言われています。そしてこの歴史的な知識と言っているときに、歴史が地理の上に成り立っているということも当然教員の方はわかって言っているわけですが、学生の方がそれをわかっていない。地理は地理、歴史は歴史と全く切断してしまって、そういったところでの歴史認識ができないという声になっていようかと思います。

そして、そういう学生に対してリメディアル教育、つまり補てん教育ですが、それは必要であるかという問いに対しては、学生のレベルを考えると必要なのだろうけれども、大学として本当にそこまでやるべきなのか、やるとして何をどこまでやるのか、授業担当者としてだれがやるのかといった大きな問題があって、なかなか踏み切れないだろうというのが人文系です。社会系の方は、同じように学生の基礎知識が身についていないということで、特に近代以降の世界史・日本史の知識が欠落している、断片的だ、系統的でない、法則的な理解がない、表現力や読解力に欠けている、そもそも好奇心がないというような指摘が出てきておりました。

リメディアルということに関しては、社会系の教員の多くは、リメディアル教育は必要ではないだろうとしています。必要ではないけれど、ただし、高校レベルの知識に欠ける者が少なくないので、基本的には講義やゼミでの読書指導などが必要だろうとしています。そして社会科学入門、この社会科学入門というのは、つまり、先ほど私が言ったように、地理なら地理、歴史なら歴史というものを分断･切断せずに、一つの社会事象として物事を見ていく、そういったタイプの入門的な授業が重要ではなかろうかというのが社会系の先生方の意見として出てきておりました。

そのほか、学生の気質に関して、岐阜大学の学生についてですが、大半はまじめだけど、知の探究に貪欲とは言えないとしています。「本の虫」というような者もいないということです。アグレッシブに行動するタイプも少ない、輪切りにされて岐大に来ていて、平均的なそこそこの学生が多いとしています。しかし、それでも学生たちはそこに安住することなく、何を人生の目標とすべきなのか、真剣に考え行動する知性として社会に羽ばたいてくれることを教員たちは熱望しているのだとまとめております。そのために教養教育推進センターとしてもさまざまなことを行ってきているわけです。

そして、現在もうほとんど出来上がってきておりますが、「人生を決めた書物」といった小冊子を 50 人程の教員から原稿を集めて発行する予定になっております。ここには、その先生

たちが学生時代に何を思い、何を願って勉強していたのかというようなことが書かれていて、それを触発してくれた本を紹介するというようなものになっております。こういったものを学生が手にとってくれて、物を学ぶということの意欲を喚起してほしいと願っているわけです。

以上、簡単な提題ですが、お三方の先生が何をテーマにここで発表していただくかということの手がかりにしていただきたいということで、趣旨説明をさせていただきました。

ありがとうございました。

【司　会】

それでは、早速講演に入らせていただきますが、一応形式的には第一部の基調講演、それから第二部のテーマ討論という形になっております。それぞれお話をしていただいた上で、我々の方から自由にあれこれ質疑・応答していきたいと思っております。

最初に基調講演として、昨年度まで岐阜県教育委員会の教育次長を務められ、この４月から教育学部の教職大学院で教鞭をとられております小山 徹先生からお話を伺いたいと思います。その講演の演題は「高等学校の社会科教育」で、特に地理を中心としてということでありますので、お手元の資料をご覧になりながらお話を聞きたいと思います。

第一部　基調講演

高等学校の社会科（地理歴史科・公民科）教育

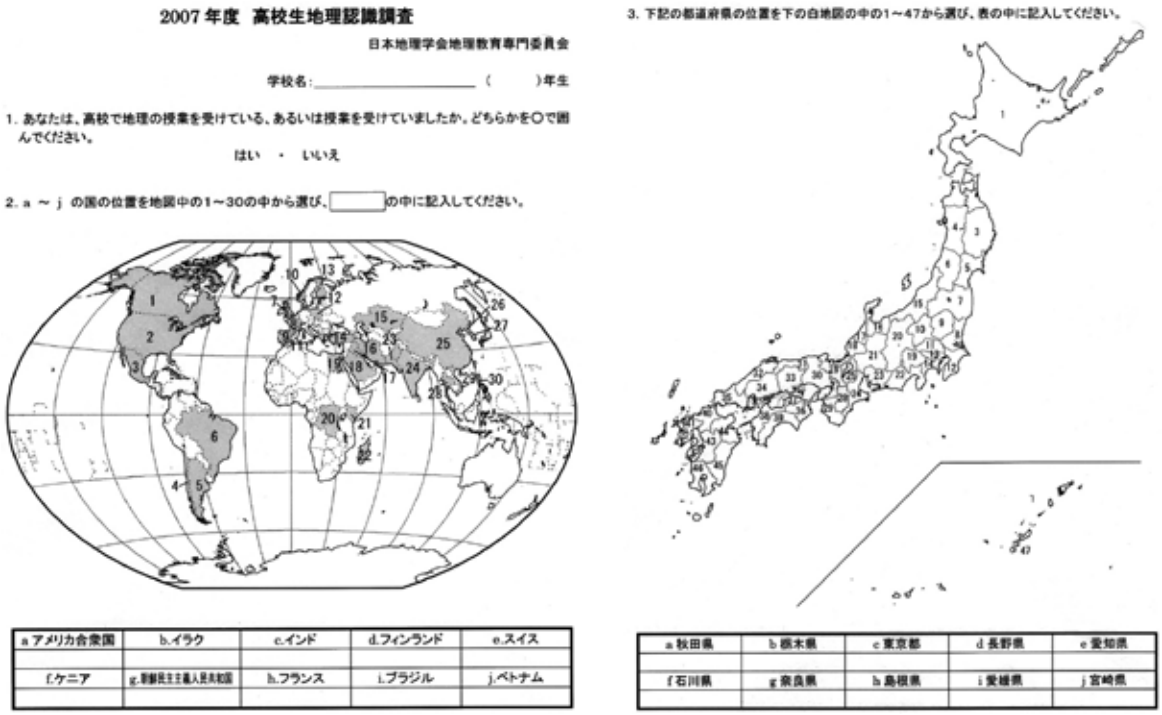
――― 特に地理を中心として ―――

岐阜大学教育学部・教職大学院
教授　小　山　　徹
（元岐阜県教育委員会・教育次長）

1　地理教育の危機

（1）地理的認識の現状

日本地理学会は、2007 年 12 月から 2008 年 2 月にかけて、高校生 6,159 人（51 高校）、大学生 3,747 人（31 大学）を対象とした、同じ設問による地理認識調査を実施しました。その結果は新聞に大きく報道され、ご記憶の方も多いかと思います。


2007 年度　高校生地理認識調査

日本地理学会地理教育専門委員会

学校名：＿＿＿＿＿＿＿＿（　　）年生

1. あなたは、高校で地理の授業を受けている、あるいは授業を受けていましたか。どちらかを○で囲んでください。

はい　・　いいえ

2. a ～ j の国の位置を地図中の1～30の中から選び、□の中に記入してください。

a アメリカ合衆国	b.イラク	c.インド	d.フィンランド	e.スイス
f.ケニア	g.朝鮮民主主義人民共和国	h.フランス	i.ブラジル	j.ベトナム

3. 下記の都道府県の位置を下の白地図の中の1～47から選び、表の中に記入してください。

a 秋田県	b 栃木県	c 東京都	d 長野県	e 愛知県
f 石川県	g 奈良県	h 島根県	i 愛媛県	j 宮崎県

図 1　地理認識調査用紙

ご覧のように、問 1 で地理履修の有無を聞いた後、問 2「10 ヵ国の位置」では、アメリカ合衆国、イラク、インド、フィンランド、スイス、ケニア、朝鮮民主主義人民共和国、フランス、ブラジル、ベトナムを、世界地図上に示された 30 カ国の位置から選ばせています。確かに、ケニアとコンゴやイランとイラクなどに迷うことはあるにせよ、地理的な常識としてそれ程難しい問題ではありません。問 3「10 都県の位置」では、日本地図上に全都道府県が 1 から 47 までの番号で示してあり、秋田県、熊本県、東京都、長野県、愛知県、石川県、奈良県、島根県、愛媛県、宮崎県の位置を、それぞれ番号で選ばせています。これも鳥取県と島根県や栃木県と群馬県などの位置に少し迷うかもしれませんが、易しい問題といえます。また、問 4 と問 5 では、地理的な用語として食糧自給率、原油輸入先、時差、エルニーニョ発生海域などを問うています。

高校生の結果を見ると、宮崎県の正答率は 42.7％であり、半数以上の生徒が宮崎県の位置

が分からない。イラクにいたっては正答率が 25.6％でしかない。毎日のＴＶニュースや新聞で何を見ているのか、と言いたくなるような惨憺たる結果でした。ただ、高校で地理を履修している生徒については、地理的な認知が高い、特にアメリカ、インド、ブラジルを除く各国については有意に高いという結果が出ました。一方、日本の都県については、地理履修者と未履修者との間に有意な差はありませんでした。いずれにせよ、高校生の半分以上は、東国原知事で何かと話題も多かった宮崎県の位置を知らないという現実です。

では、大学生はどうだったのでしょうか。まず基本的に、前回 2005 年の調査に比べて正答率が落ちているという結果が示されました。しかし同時に、高校で地理を学んだ者は、そうでない者に比べて国の認知度も都県の認知度も高いという結果も示されています。

もっとも、日本地理学会によるこの実態調査は、高校で地理を履修することの大切さを訴えたいがためという意図が見え隠れしますが、とにかく、高校における地理の履修の有無によって地理的認識には大きな差が生じており、日本の高校生や大学生の地理的認識のレベルは、きわめて憂慮すべき状況にあることを如実に示しています。

（２）大学における状況

大学における地理教育の危機の状況についは、データが少し古いのですが、2003 年に愛知学院大の報告があります。報告者は、文系の学部で教養教育として地理学を 10 年ぐらい教えてきたが、2003 年の段階で高校で地理を履修した生徒は 5％程度であり、この数値は年々低下してきていること、また、履修者と未履修者の間には地理的な能力差が極めて大きいため、非常に授業がやりにくいと述べています。*

＊　山野明男，大学の教養教育における地理学，『名古屋地理 No.17』，p3-4，名古屋地理学会，2003

もう一つ、1996 年に愛知教育大学の地理学教室に在籍していた学生（1 ～ 4 年生）77 人について、高校時代に地理を履修したかどうかを調査したデータがあります。高校 1 年から 3 年までの各学年で地理を何単位履修したかという調査であるため、複数年度にわたって継続履修した場合はダブルカウントされているようですが、延べ 231 人のうち履修した者が 52 人で 22.5％という数字が出ております。ここからダブルカウント分を差し引くと、実際の履修者はもっと減るはずであり、多分、2 次試験の受験科目として地理を選択した 15％という値に近づくもの思われます。つまり、愛知教育大学で地理を専攻し、将来は地理の教員になろうとしている学生の 85％が、2 次試験において地理を選択していないということになり、その理由としては、高校で地理を履修していないということが考えられます。*

＊　阿部和俊，大学における地理教育の最近の問題点，名古屋地理 No.9，p29-31，名古屋地理学会，1996

これが、現在の「地理」の置かれている状況です。高校では地理を履修していない、大学で地理を専攻しようとしている者ですら、高校では地理を履修していないという実態が見えてきます。

（３）危機への警鐘

高校の地理教育については、2006 年に東京の都立高校では地理教師がいなくなるのが早いか、地理が各高校のカリキュラムから消えるのが早いか、という段階にあると警鐘が鳴らされています。この背景として､現在は世界史必修のためどうしても世界史教員の採用が優先され、地理教員の採用は極めて少ないことが指摘され、その結果、地理教員はどんどん高齢化している現状が報告されています。また、受験科目に地理を置かない大学が数多くあるため、進学校のカリキュラムから地理が消えていく傾向にあることや、センター試験では、地理の問題なのか現代社会の問題なのか分からないような問題が出題されているため、地理を学ばなくなっている点にも言及されます。*

＊　新堀毅，地理がなくなる？地理教師がいなくなる？，月刊 地理 Vol51-6，p22-27，古今書院，2006

岐阜県の高校地理教育に関しても、2005年の時点で県内高校の地理教員67人の人口ピラミッドをつくってみると完全なつぼ形となり、しかも著しく男性に偏っていることが報告されています。さらに、この状態が続くならば、8年後の2013年には、この内の半数（34人）が定年退職を迎えることになり、そのような状況では、地理教員がいないという理由によって各高校のカリキュラムから地理が消えてしまう可能性が非常に高いと指摘するとともに、地理教員の適正な配置や採用に県教委としての早急な対応が必要であると問題提起しています。*

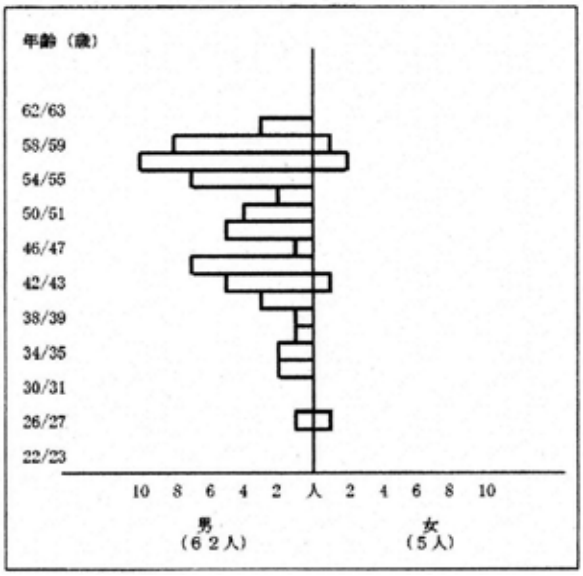


図2　県内地理教員の状況（今井春昭作成）

＊　今井春昭，地理学存亡の源流(1)，岐阜地理 第40号，p10-13，岐阜地理学会，2006

（4）日本史必修化への動き

学習指導要領の改定期を迎え、様々な学会や団体が高等学校の地理歴史科・公民科の科目構成や履修形態に関する要望書を提出しています。この中で、平成18（2006）年9月に、神奈川県、東京都、埼玉県、千葉県の教育長が連名で、日本史必修に関する要望書を提出しました。学会や教育団体ではなく、首都圏1都3県の教育長が、つまり教育委員会が日本史の必修化に関する要望をしたということは、きわめて異例なものです。

中央教育審議会は、平成20（2008）年1月17日に、高等学校の地理歴史科・公民科に関しては現行の枠組みを変えないと表明しました。

それを受けて神奈川県教育委員会は、県独自で高校日本史を必履修にすると発表しました。新学習指導要領施行の時期に合わせて、必履修の世界史とともに、次の方法で全県立学校で生徒全員に日本史に関する科目を履修させる方針を打ち出しました。

1．世界史のほかに、日本史Ａまたは日本史Ｂを履修
2．日本史を履修しない場合には、新たな学校設定科目（神奈川県の郷土史を学習する科目、近現代史を学習する科目）を必ず履修

つまり、神奈川県教委は、高校では地理を学ばなくてもよい、どうしても地理を学びたいのであれば、さらに1科目・日本史に関する科目を余分に履修せよと決定した訳です。

2　危機の背景

（1）学習指導要領の変遷

では、このような地理教育の危機の背景について、まず学習指導要領から見ていきたいと思います。

中学校の授業時数は、昭和33年版以降、学習指導要領の改定ごとに少なくなってきています。それに伴い、各教科の配当時間数も減少しており、社会科の三分野、地理的分野、歴史的分野、公民的分野の時間も順次減ってきています。特に、平成10年版が余りにも大きく減らしたということで、平成20年版では逆に増やしたので、少しは盛り返してはおりますが、大きな流れとして減少傾向があります。

	S33	S44	S52	H1	H10	H20
中学校総授業時数	3,370	3,535	3,150	3,150	2,940	3,045
社会科授業時数計	455	455	385	350～385	295	350
社会科の割合（%）	13.5	12.9	12.2	11.1～12.2	10.0	11.5

		S33	S44	S52	H1	H10	H20
学年別	第1学年	140	140	140	140	105	105
	第2学年	175	140	140	140	105	105
	第3学年	140	175	105	70～105	85	140
分野別	地理的分野	140	140	140	128～140	105	120
	歴史的分野	175	175	140	128～140	105	130
	公民的分野	140	140	105	96～105	85	100
社会科授業時数計		455	455	385	350～385	295	350
地理的分野の割合		30.7	30.7	36.4	36.4～36.6	35.6	34.3

図3　中学校学習指導要領における授業時間数の変遷

次に高校学校社会科でございます。これもお手元にプリントを入れさせていただきました。S31 版とありますが、これは昭和 31 年に告示された学習指導要領という意味です。その右に矢印と S31 とありますのは、昭和 31 年度から実施されたよという意味です。私より少し年配の先生方が受けられた社会科社会や人文地理という科目が見られます。

		S31版→ S31	S35版→ S38	S45版→ S48	S53版→ S57	H1版 → H6	H11版→ H15	
社会科	世界史	3～5		3	4			地理歴史科
	世界史A		3 ○いずれか			2 ○いずれか	2 ○いずれか	
	世界史B		4			4	4	
	日本史	3～5 ○	3◎	3 ○2科目	4			
	日本史A	2科目				2	2	
	日本史B					4	4	
	人文地理	3～5				○1科目	○1科目	
	地理				4			
	地理A		3 ○いずれか	3 (系統地理)		2	2	
	地理B		4	3 (地誌)		4	4	
	社会	3～5◎						公民科
	現代社会				4◎	4	2	
	倫理				2	2 ○いずれか	2 ○いずれか	
	倫理・社会		2◎	2◎				
	政治・経済		2◎	2◎	2	2	2	

注1：網掛けは、科目設定ナシ　　注2：数字は単位数（標準）　　注3：◎印は必修（必履修）、○印は選択必修（必履修）

図4　高等学校学習指導要領における科目構成の変遷

私が高校に入学したのは昭和 38 年度ですので、ちょうど昭和 35 年度版のスタートの年でした。見ていただきますと、まず日本史 3 単位が必修でございます。◎印は、全員必修でございます。それから世界史は 3 単位の世界史 A と 4 単位の世界史 B からなり、はっきり言えば進学校かそうでないかという違いと考えていただければいいと思いますが、いずれかを履修す

る。地理も世界史と同じく地理Ａ３単位と地理Ｂ４単位のいずれかを履修する。そして倫理・社会、政治・経済、つまり社会科系の科目は全て必修でした。同じように、理科も物理・化学・生物・地学の全てが必修でした。社会科・理科ともに科目数が多く大変でしたけれど、自分にひょっとしたらそれへのノスタルジアがあるのかもしれませんが、何か一番安定した教育課程であったように思われます。それぞれの科目は内容的に浅かったかもしれませんが、社会科や理科の全科目を広く俯瞰したことで、何かが残っているような気がいたしております。

次の昭和45年版、48年度からの実施で私が教員になった年でございます。これは世界史と日本史と地理、地理が系統地理のＡ・地誌のＢと二つに分かれていますが、ここから２科目を履修します。この場合も、最低２科目というわけですから、前の学習指導要領と同じように１年生で地理を、２年・３年で世界史、日本史の両方を履修する、学校によっては理科系はどちらか一つという分け方があったようです。また、倫理・社会と政治・経済が必修ですので、社会科全体の基本的な枠組みはあまり変わっていません。

大きく変わったのが昭和53年版です。必修は現代社会４単位のみ、しかもこの現代社会は原則１年生で履修するとされました。これによって、それまでの地理は１年生で、２・３年で日本史、世界史を履修するとされていた基本的なパターンが崩れました。１年生で現代社会に４単位を履修すると、もう時間枠が無くなり地理が２年生以降に回らざるを得ない。そうなれば、日本史・世界史・地理の分捕り合戦が始まります。この時の教育課程の編成が随分大変だった記憶があります。これは学校全体としての教育課程委員会のバトルも大変でしたし、教科内のバトルはもっと大変でした。日本史と世界史の教員を相手に回して、地理の教員も必死になって戦った記憶があります。ただし、負けました。

さらに大きな変化が次の平成元年版です。この平成元年ショックは、現在もなお大きな影響を残しています。従来の社会科が地理歴史科と公民科の二教科に分割され、地理歴史科では、世界史Ａ・Ｂいずれかが必履修になりました。国際化の進展を初めとして、社会の変化に対応するには世界史的な知識が必要である。それに対して中学校ではきちっと世界史を学習していない。だから高校で必履修にするという説明でした。さらに日本史Ａ、日本史Ｂ、地理Ａ、地理Ｂから１科目を選択して必履修するという組み立てです。内容に関しては、地理の指導内容がここで大きく変わりました。地名・物産の地理からの脱却という表現が極めて強くなり、地理的な見方、考え方を学習させるという点が強調されました。この傾向は地理に限らず、他の科目においても学び方を学ぶという点に重点が置かれました。同時に、網羅的な学習から、幾つかの地域を取り上げてという転換もなされました。それまでは、世界地誌であれば北アメリカも南アメリカも、アフリカもオセアニアも、とにかく全部やりました。深い浅いは別として、全部学びました。それが、二つまたは三つの地域を選んでとか、三つ程度を選んでというように切りかわりました。これは絶対的な時間数の確保の問題だろうと思います。また、地理の教師としては、地名・物産の地理から地理的な見方、考え方の学習ということは非常に歓迎すべきことです。正直、大学で地理を学んできて、高校の教壇に立って愕然としたのは、科目地理と地理学は全く別物なんだという気がしたことがあります。そのため、地理的な見方、考え方を重視する学習という新しい方向には非常に期待すべきものがありました。

（２）教育課程の編成

次に、各高校での教育課程の編成についてご説明します。

教育課程の編成の基本については、学習指導要領総則第１款に学校の実態、課程や学科の特色、生徒の特性等を十分考慮して、適切な教育課程を編成すると示されております。とすれば、その学校がどういうタイプの学校であるかは相当色濃く出るはずです。事実、かつて教育課程は県教委の承認事項でしたが、地教行法の改正によって県教委への届け出事項に変わり、各学校とも独自の教育課程を編成することが可能になっております。

各学校では、それぞれの教科会で科目の配置や単位数等をいろいろ協議します。さらに、教科の代表が教育課程委員会へ出て、学校全体の教育課程を協議します。学習指導要領に大きな変更がない限りそんなに大きな問題にはなりませんが、学習指導要領の改定期や学校として教育課程を大きく変えようとするときは、教育課程委員会は相当熱のこもった協議というかバトルになり、何度も何度も教科会に持ち帰って検討し直したりします。最終的には職員会議を経て校長が決定します。ですから、各学校での教育課程の編成は、ある意味、その学校が何を目指しているのかに大きく影響されるということです。

（3）履修科目の選択

生徒が履修科目を選択するとき、何をもとに選んでいるのでしょうか。自らの興味関心、裏を返せば、得意・不得意、もう少し掘り下げれば、好き嫌いでしょう。それから、社会人として必要な基本的教養という選択肢、私はあまりこういう生徒に出会ったことはありません。文系か理系かは大きく関係します。ただ、この文系・理系というのが、一体何だろうかということを真剣に考えれば考えるほど分からなくなります。文系って何だろう。ましてや、文系を選ぶのは理数科目が苦手な生徒で、理系を選ぶのは文系科目が苦手な生徒、つまり、文系科目が得意だから・興味があるから文系、理系科目に興味があるから理系ではないような現在の傾向の中で、この文系・理系という区分は意味があるのか疑問です。それから、地歴科の場合、必履修が２科目ありますので、世界史のＡ・Ｂいずれかと何を組み合わせるか、これは指導する先生によって、世界史＋日本史の歴史同士の方がいいとか、世界史を履修するのならやっぱり地理も履修しておかないと全体像が分からないとか、様々に言われています。ただし、一番大きいのは、大学の受験科目に適合するか否かです。自分が受けようとしている、もしくは受けたいと思っている大学の受験科目に地理があるかないか、これは相当大きな問題になります。それ以外に、センター試験の難易度、平均点、これは毎年変わりますが標準偏差はあまり大きくは変わりません。どうもそこらが関係あるかなと思っています。学習内容の多い少ないという点も随分気になるようで、教科書を見せてくださいと生徒がたくさん来ます。何を調べているのかと思ったら、厚さを比べていました。もしくは、本文中のゴチの多さを比べていました。つまり、生徒が履修科目を選択する指標は、その程度なのです。

履修科目を選択する時期、これにもご注意いただきたいのですが、１年生の６月頃までに最初の希望を出しています。２年生から文系・理系に分かれるクラス編制をするためには、高校に入学してすぐの６月頃までには、文系・理系のどちらか、履修科目とその組み合わせを決めさせるわけです。これでは正直なところ無理だと思いますが、クラス編成や次年度の教員配置計画などの関係上、この時期にそれを問わねばならないのが現実です。

（4）大学入試の影響

大学入試の影響、先程も触れましたが、文系には大学入試で地理は不利だという神話があります。つまり、私立大学の中には受験科目に地理がない学部・学科があります。例えば、早稲田、慶應、明治、日大、同志社、関学、南山、名城、名学、中部、金城、愛知淑徳など、有名校がいくつもここに並びます。これは大学全体としてないところもあれば、文系の学部学科にのみないところもあります。ただし、高校１年生の段階で、最終的にそこを受けるか受けないかは別としても、有名私大が受けられない危険性があるのであれば、そのリスクを冒すことは避けると思われます。また、国公立の２次試験では、地歴を課している大学は超難関校に集中しています。つまり、地歴はあくまでセンター試験向けであり、２次試験や私学文系は地理では受けられないことがあるとすれば、履修科目として選択することはちょっと考えますね。

では、理系は地理が有利なのかというと、これがよく分からないのです。例えば、地理には理科系的な思考が求められるからと言われます。よく聞いていると、地理では数字を使うだろ

うとか、グラフを読み取るだろうとか、これは理科系の問題でなないのであって、理由付けとしてはおかしいと思います。また、地理は考え方を問う、覚えているだけでは解けない問題が必ず出題されるも理由に挙げられます。この場合も、強いて言えば理科系的な考え方が役に立つのかなあ程度です。20 年のセンター入試の結果を見ましても、地理は平均点 66.4、標準偏差が 16.1、世界史が 59.0 の 21.0、日本史Ｂは 64.3 の 18.3。つまり、地理は平均点が高く標準偏差が小さいということは、当たり外れがないということです。地理で受けておけば当たり外れがないだろうと。だから、社会科なんてやっている暇のない理科系にとっては、地理は有利だというだけの話です。

（5）地理担当の教員

次に高校で地理を担当している教員の問題を考えます。私は大学で地理を専攻しましたが、教員免許状は高等学校・社会科です。ですから、社会科の構成科目である日本史も世界史も地理も、それから現代社会も倫理も政治・経済も、全部を教えることができますし、また教えねばならないのです。例えば「私は、日本史が不得意だから担当したくない。」と言っても、「でも、免許は社会科だろう。」の一言で終わります。

県内の高校の社会科（現在は地理歴史科と公民科）の教員、県立・市立・私立を含めた数字ですが、今年度は 433 人です。その中で地理部会に属するのは 61 人で、社会科教員の 14.1％になります。一番多いのが日本史、50％を超えていると思います。先ほど 2005 年度の地理教員の人口ピラミッドから、8 年後には 34 人、半分がいなくなるとお話ししましたが、あの時は地理部会員が 67 人でしたから、現時点でもう既に 6 人減っています。

各年度に担当する科目数は、各学校の社会科のカリキュラムと教員数にもよりますが、一般的には 2 科目から 3 科目を担当することになります。各教員の専攻や得意な分野が考慮されますが、先ほど申しましたように専攻外の科目を担当することも当然ございます。また、ホームルームを担任する学年で開講されている科目をできるだけ多く持てるような配慮もなされます。1 年、2 年、3 年と順に持ち上がっていけるよう担当科目が調整されていくわけです。ただし､地理の場合はいささか異なります。私は教諭として 18 年間､地理を担当してきましたが、その間に 3 年生のホームルーム担任はわずか 2 回だけです。仮に持ち上がりで 3 年ごとと考えれば、6 回は 3 年のホームルーム担任ができるはずですが、実際は 2 回しかありません。理由は、地理専攻である私が 3 年のホームルームを担任すると、3 年の開講科目である日本史なり世界史を担当することになり、そうなると、社会科の中で誰かが私のかわりに 1 年生の地理を持つことになってまいります。そんな時に必ず出てくるのが「地理は特殊だから。」この言葉です。同じ社会科でも地理は他の科目とは少し違うという意味です。ですから、自分は日本史専攻だけど世界史なら担当してもいい、でも地理は今まで教えたことがないし、ちょっと教えられない、という発言が出てくるわけです。なぜか地理を教えることに対する拒否感があります。これはひょっとしたら、地理は扱う統計資料のデータが毎年変化することから、基本的な知識の蓄積が難しいという特性によるのかと思ったり、どうもご本人の大学受験科目に大きく関係しているのではないかという仮説を立ててみたりもしました。先ほど、この後でお話しされる所先生にこの仮説を披露したら、僕は日本史だけど地理を教えたこともあると言われたので、この仮説はあえなく潰れましたが、社会科教員の中に何となく地理を忌避する傾向はあるようです。

3　危機の検証

（1）地理履修者は減少したのか？

県内の教科書需要数から科目別の教科書需要数の変化を見ました。教科書は主たる教材として必ず使わなければいけませんから､教科書の需要数は各科目の履修者数に一致するはずです。

ただし、1年生、2年生、3年生の別、これはこのデータからは分かりません。しかも生徒数の増減や教育課程の変化で各年度・各科目の需要数は微妙に変化しますので、必履修の科目の需要数を100として、例えば平成5年までですと、必履修の現代社会を100に、その後は、必履修の世界史（A＋B）を100とする、こういう条件で各科目の需要数を操作しました。この数値を平成元年度から平成20年度までグラフにしてみました。なお、平成6～8年度と15～16年度は、学習指導要領の移行期で新課程と旧課程の両方の教科書が使われていますので、この期間の数字はあまり信用できないということです。

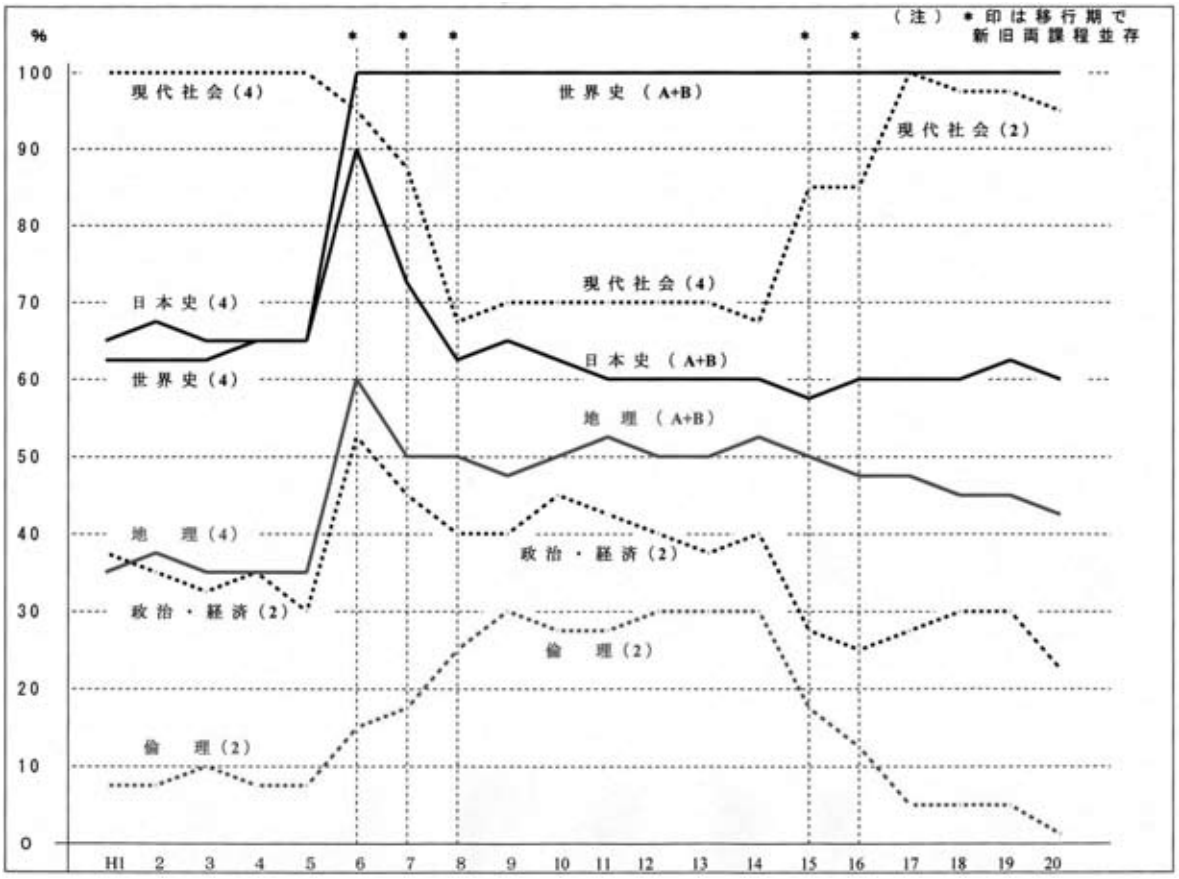


図5　地理歴史科・公民科の科目別教科書需要数の変遷

地理だけを見ていただきますと、平成5年度までは大体30％の半ばで推移していますが、8年度以降になりますと50％、さらに16年度以降でじわじわと下がってきていますけれども、まだ40％はありますから、履修している生徒数は平成5年度に比べると増えています。地理の履修者が減ったと言われていますが、教科書の需要数から見る限り減っていません。それから、極端なのは現代社会で、必履修の期間中は当然100％ですが、平成元年版が実施された平成6年度以降になりますと、現代社会4単位もしくは政治・経済2単位と倫理2単位の計4単位のいずれかを選択ということで、がくんと70％まで落ちました。ところが、平成15年版が実施された平成17年度になりますと、今度は現代社会2単位もしくは政治・経済2単位と倫理2単位の計4単位のいずれかを選択になりますので、一気にまた100％近くに戻っていく、事ほどさように、学習指導要領の必履修であるとか、その組み合わせということが、高校の授業に大きな影響を与えているということをご理解いただけたと思います。高校で何を学ぶべきか、学ばせるべきかという議論もありますが、一方では、何を選択するのが有利かという考え方も当然出てきているということです。

今度は日本史・世界史・地理について、科目ごとにA・Bの教科書需要数の合計を100と

して、Ａ・Ｂそれぞれが何％を占めているかということを見てみます。

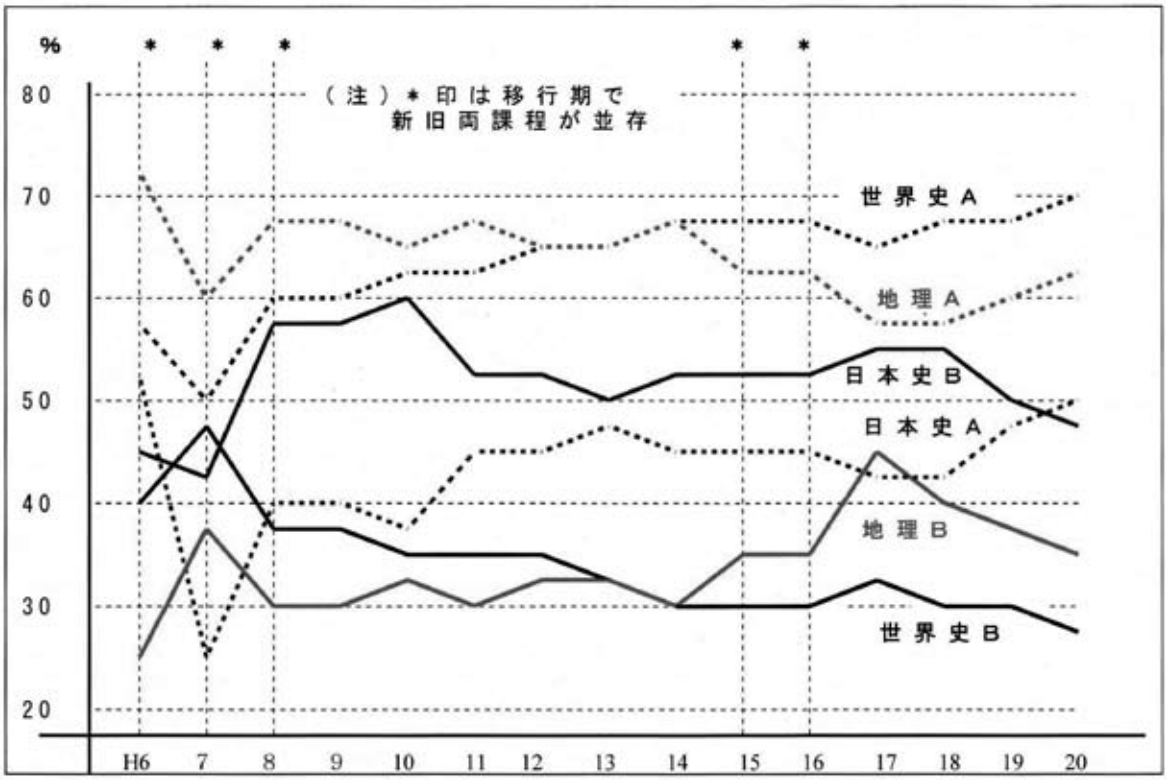


図６　地理歴史科Ａ科目とＢ科目の教科書需要数の変遷

はっきり言えることは、全体としてＢ科目が近年減ってきている、これは確かです。反面、Ａ科目は当然増えてきている。Ｂ科目は、どちらかというと受験ということを意識しているとするならば、それが減っていることは言えるかもしれない。ただ、必履修にした世界史ではＢ科目は30％前後と低迷しています。これは、高校の社会科教員の感覚からすれば当然のような気がします。高校生にとって世界史というのは、多分一番難しい科目になると思います。極めて広範な、しかも時間的な縦軸と空間的な横軸を組み合わせを頭の中に作るという作業は、相当大変だという気がします。ただ、ここで言えることは、決して地理だけが減っているわけではない。確かに地理Ｂは減っているけれども、それは日本史Ｂや世界史Ｂと同じ傾向であり、しかも世界史Ｂよりは履修者数は多いということが分かります。

（２）地理は開講されているのか？

岐阜県立高校における地理Ａ、地理Ｂの開設・開講状況を見るために、岐阜市内の県立高校から幾つかをピックアップしました。Ａ高校はトップクラスの普通科進学校、Ｂ高校は第２グループの普通科進学校、Ｃ高校は国公立大学への進学者がほとんどない普通科高校、Ｄ高校は大学進学者がほとんどない普通科高校です。また、比較のために専門科の高校からＥ農業高校、Ｆ工業高校、Ｇ商業高校もピックアップしてみました。

普通科（平成１９年度）		文系				理系			
		2年		3年		2年		3年	
		地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B
A高	1		3日		③日		2日		③日
B高	0						2		②
C高	0		2日		②日			2日	
D高	1			3		3			
↑ 地理教員数（高教研地理部会）									

専門科（平成１９年度）		1年		2年		3年	
		地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B
E農高	0			2			
F工高	0	2					
G商高	0					2	
↑ 地理教員数（高教研地理部会）							

図７　地理の開設状況（岐阜市内校の例）

ご覧になってお分かりのように、全ての高校で地理が開設されています。ただ、第２グループの進学校であるＢ高校では文系に地理がないのが気になります。また、専門高校になりますと、学校選択ですね。例えばＦ工業高校では、１年生は全員が地理Ａを履修しなさいという形になっています。なお、学校名の横に数字が縦に並んでいますが、これは地理専攻の教員が何人いるかを示しています。地理の教員がいない学校もあります。では誰が地理を担当しているかというと、地理は特殊だからとぶつぶつ言いながらも他の専攻の社会科教師が仕方なしに担当することになるわけです。こういう状況です。

もう少し絞って岐阜大学入学者の出身高校を見てみようと、平成19年入試において現役合格者数の多い学校を上から12校ピックアップしました。Ｌ高校、Ｐ高校、Ｒ高校、Ｓ高校には文系に地理はありません。しかし、ほかの８校は文系で地理を開設しています。例えば、Ｈ高校では２年生で地理Ｂを３単位、日本史Ｂとの選択で開設しています。３年生になると、こ

開設 教育課程表から（平成１９年度）		文系				理系			
		2年		3年		2年		3年	
		地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B
H高	50		3日		③日		2日		③日
I高	40		2日	2日世	②日		2日世	2日世	③日世
J高	38	2日世	4日世		⑤日世		2日		③日
K高	37		3日		③日		3日世	2世	①日世
L高	36						3日世		②日世
M高	33		5日世		③日世		3日		②日
N高	28		2日		③日	2日			3日世
O高	27	2日世				2日世	3日世		③日世
P高	27						4世	2世	
Q高	24		3日		②日		3日		①日
R高	21						3日世	2日世	①日世
S高	20						3世	2世	②世
↑ 岐大現役合格者数（H19入試）									

図８　地理の開設状況（岐阜大学現役入学者の多い高校）

の○で囲んであるのは、2年生で地理Bを選んだ人は3年生でも地理Bを3単位、日本史を選んだ人は日本史を3単位、それぞれ継続履修しますという意味です。また、I高校を見ると、2年生で地理Bを日本史との選択でやはり2単位、3年生と合わせて計4単位履修する。履修単位数も各学校ばらばらですが、多くの学校で文系の地理が開設されており、地理履修者が減少したという認識とは異なった結果です。

そこで、各高校に電話して校長先生から直接、今年度の開講状況を聞きしました。

開講 聴き取り調査（平成２０年度）		文系				理系			
		2年		3年		2年		3年	
		地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B	地理A	地理B
H高	1		~~3日~~		~~③日~~		2日		③日
I高	2		~~2日~~	~~2日世~~	~~②日~~		2日世	2日世	③日世
J高	2	~~2日世~~	~~4日世~~		~~⑤日世~~		2日		③日
K高	0		~~3日~~		~~③日~~		3日世	2世	①日世
L高	2						3日世		②日世
M高	1		~~5日世~~		~~③日世~~		3日		②日
N高	2		2日		③日	2日			3日世
O高	2	~~2日世~~				2日世	3日世		③日世
P高	1						4世	2世	
Q高	1		~~3日~~		~~②日~~		3日		①日
R高	3						3日世	2日世	①日世
S高	2						3世	2世	②世
↑ 地理教員数（高教研地理部会）									

図9　地理の開講状況（岐阜大学現役入学者の多い高校）

聴き取りの結果、文系の地理はカリキュラム上開設はされていますが、受講者が集まらないので実際には開講されていないということが分かりました。これは、一昨年度に大きな問題になった世界史の未履修問題、世界史を履修していることにして実際は他の科目を履修していたという話とはまったく異なります。カリキュラム上では地理を選択ができるように科目配置してありますが、受講者が集まらないから開講できないということです。例えば、受講希望者がきわめて少人数であれば、担当する教員の数や受け持ち時間数の問題もありますから、その科目を開講することは不可能になります。つまり、岐阜大学入学者数の県内上位12校では、文系で地理を開講しているのはN高校のみであったわけです。ですから、岐阜大学入学者のうち、文系の学生の多く若しくはほとんどは、高校で地理を履修していないのです。この点が最大の原因と思われます。

4　危機への対応

（1）元教科調査官の指摘

平成元年版の学習指導要領が告示されたときの教科調査官が、2006年の月刊「地理」に「教えやすさよりも学びたくなる地理学習を」という文章を書いていますが、この文面からは苛立ちのような雰囲気が感じられます。教科調査官として平成元年の頃からずっと言い続けてきた地理学習の変革が、なかなかできていないということに対する苛立ちです。まず、高校での地理学習が相変わらず大学入試に左右されている点が指摘されています。それから、「やっぱり地理教員は地名・物産の地理が好き？」と、地理教員が自分の教え方をまったく変えていない点に言及しています。地名・物産の地理をやっている限り、これは知識量の勝負ですから、年数を長くやっている地理教員が生徒に対して絶対的に優位に立ちます。ところが、地理的な見方、考

え方を教えようとすると、これは生徒達に考えさせるわけで、それと真っ向から勝負する地理の本質に迫る授業を実践してほしい、そのように授業を改善をしてほしいと強く訴えています。*

＊　渋澤文隆，教えやすさより，学びたくなる地理学習を，月刊地理 Vol51-8，p17-23，古今書院，2006

（2）地理教員の認識

この2年後に「月刊地理」は、この月刊誌は高校や中学の地理教員によく読まれていますが、「学校教育で地理はなぜ必要か。」という誌上フォーラムを企画し、全国の地理教員の意見を募集し掲載しました。しかし、ここで述べられた地理教員の意見は、「地理は基礎学問と実学をあわせ持つ分野である」、「地理は地歴・公民の基礎科目であり、日常生活に必要不可欠」、「世界レベルで物を考えるとき地理は必要な基礎学力」、「歴史の縦糸と地理の横糸」、「歴史と同様車の両輪」などでした。元教科調査官が、地理の本質を考えた授業をと書いた僅か2年後に、誌上フォーラムに投稿するぐらいですから、現役でもＯＢでも授業熱心な地理教員だと思われますが、誰も地理を独立した科目とは位置づけて考えていないんです。地理教員自らが、地理は基礎科目だと、もしくは歴史と組み合わせて一本なんだという認識なんです。このほかにも地理教育の現状を詠嘆する意見もありましたが、本来の問いかけである学校教育で地理はなぜ必要かについて、誰一人答えていない。明確に地理の必要性を答えることができない。これは地理教員にとっての大きな問題だと思います。*

＊　誌上フォーラム：学校教育で「地理」はなぜ必要か？，月刊地理 Vol53-6 ～ 53-8，古今書院，2008

同じく「月刊地理」は、地理教育が衰微していく現状を打破するためには、地理履修者をとにかく増やさなければならない、じゃあその手だては何かということで、特集「高校地理履修者を増やす」も企画しています。全国の地理教員が考えついたのが、センター試験の受験者をターゲットに増やそうということでした。理系の場合は、分布図や断面図を描かせたり、傾斜角を計算させたり、理数科的な刺激で生徒を呼び込もうとするものであり、文系の場合は、現代社会と組み合わせてセンター試験を受験すると非常に得点率がよくなるという経験則から、これを梃子に生徒を呼び込もうという考えもあります。ほかにも、4大進学率の低い高校で履修を増やす、国際理解の視点から他教科科目と関連してとか、ＩＣＴを利用して教科情報と関連してとか、ＳＳＨ・スーパーサイエンスハイスクールをきっかけに増やそうとか、様々な意見が出されました。*

＊　特集：高校地理履修者を増やす，月刊地理　Vol51-8，古今書院，2006

これらの意見の中で、前に示しました地理の本質を学ぶ授業の展開をという元教科調査官の指摘に近い意見は、地域研究型の学校設定科目で増やすぐらいでしょう。正面からそれに答えているのは。ただし、今これだけ教科科目の授業時間数がタイトになっている中で、学校設定科目がつくれるというのは、多分一般の高校ではありえないと思います。そんな授業時間の余裕は、研究指定校や新設校など極めて限られた学校以外ありえません。とすれば、ここに提示された方法では今後も地理履修者はほとんど増えないと思います。

（3）県内地理教員の努力

県内の地理教員も、地理教育の危機に対して何とかしようと頑張っております。例えば、限られた授業時間内に学校周辺の地域調査を実施する試みに挑戦しています。本当は1日かけてじっくりと歩き回り調査したいのですが、とにかく学校周辺を2時間連続の授業で実際に歩けるようにと、現在、14校で巡検のモデルコースができています。地理が一番得意とする、実際に場所を見て、場所で考えるということ通して、地理的な見方とか考え方を培うことができないかと熱心に取り組んでいます。でも、先程見ていただいたように、地理は理系での開講が多く文系ではほとんど開講されていませんから、文系の生徒には広がっていかないというジレンマがあります。

47 都道府県や県内の市町村の位置を、白地図と小テストで生徒に定着させようと試みる地理教員もいます。なぜ高校でこんなことをとは思うけれども、実際に生徒はこんなことすら分かってないのだから、とにかくここできちんと定着させておかないと前に進めないということで、努力されています。

先程お示ししました教科書需要数から、おもしろいことに気が付きました。岐阜県内の高校では、地理の教科書の需要数に比べて地図帳の需要数が約 2,000 冊も多いのです。これは地理の授業以外でも、たぶん現代社会で地図帳を使っているからと考えられます。文系で地理が開講されていない学校や、地理を選択履修しない生徒のために、このような形で、少しでも地理的な基本知識の不足を補おうという動きです。

それから、高校の部活動において、これが多分一番大きな動きになると思いますが、地理系の部活動を復活させようとしています。かつて高校では社会科学系、地理系、歴史系、民俗系などの部活動が随分盛んに活動していましたが、近年ではこの方面に興味・関心を持つ部員が集まらないため、軒並みに廃部や休部になってきています。わずかに命脈を保っている数校の地理や郷土史の部活動が連携して、平成 15 年度に高等学校文化連盟の中に地域研究部会が発足しました。各学校の部員数の少なさを連携することで補い、合同巡研を開催や高文連の総合文化祭でポスター発表、合同の機関誌に研究成果を発表という活動の場が生まれました。地理の授業が開講されないのなら、放課後の部活動で地理に興味を持っている生徒を吸収し、地理を学ぶ面白さを伝えていこうという新しい動きです。

5　むすび

（1）岐大生の地理学習は中 2 で終了

現在、進学校の文系では地理は開講されておりません。ということは、岐大生の文系はほとんど全員が、高校で地理を履修しておりません。これが大前提です。一方、理系はどうかというと、センター試験対策として地理は勉強していますが、あくまでセンター試験突破のためだけですから、センター試験の終了と同時に蓄えてきた知識は雲散霧消します。つまり、岐大生にとって地理の実質的な学習は、中学校 2 年生の段階で終了しているということ、彼らの地理に関する基本的な知識は中 2 レベルで止まっているということです。この傾向は、ご説明してきましたように、学習指導要領や大学入試に大きな変更がない限り、当分変化しそうにないと思われます。

小学校と中学校の新学習指導要領は、この 3 月に告示されました。小学校社会科では、遅ればせながら 47 都道府県の名称と位置を教えること、中学校では世界のそれぞれの州の地域的特色を理解させる、日本のそれぞれの地域について地域的特色を理解させる、に変わってきております。しかし、新しい学習指導要領で学んだ児童・生徒が岐阜大学に入学してくるのは、まだまだ先の話です。

高等学校の新学習指導要領も年内には発表予定だそうですが、現行との大きな変更はありません。少なくとも地理歴史科・公民科は変更されません。それに伴って、大学入試も多分大きく変化することはないと思われます。もっとも岐阜大学が入試科目に地理を全員に課すとすれば話は別ですけれども、そうはならないと思いますから、この傾向は当分変化しそうにありません。つまり、進学校文系では地理は開講されていない。だから、地理を学ばずに岐阜大学に来る。これは厳然たる事実であり、将来予測です。

（2）地理教員の減少スパイラル

教員の側の問題として、地理的な見方、考え方の指導というのは、たいへん難しいものです。つまり、決め手がないんですね。これをこうすれば、地理的な見方や考え方を生徒がつかんでくれるという決定的な手だては見つかりません。ここが地理の教員が一番苦しむところです。

その結果、大学入試問題に対応するためという、大義名分もあることですし、ついつい知識量の多い少ないで勝負がかけられる地名・物産の地理に逃げてしまいがちになります。地理専攻の教員でさえ難しい、困ったなあと思っているのですから、いわんや、社会科でも他科目専攻の先生が自ら進んで地理を担当してくれるはずがないのも当然と思えます。とすれば、将来的には高校の文系から地理が消えていくことは、もう目に見えています。

地理教員減少のスパイラルは、地理の開講コマ数が減少すれば、地理教員の必要数が減少し、地理教員の採用数が減少していくことで、地理教員の絶対数が減り、その結果、また開講コマ数が減りという、完璧な減少スパイラルに入っております。こうなれば地理はもう静かに消えていくだけです。かつて、理科に地学という科目がありました。私の高校時代は地学も必修だったわけで、すべての高校で開講されていたのですが、現在、岐阜県下の高校に地学専攻の教員は僅かに9名を数えるだけです。地学は、理数科の学校に必ず開講されていますからかろうじて存続できましたが、地理はそうはいきません。ある程度減ってきたら、後は一気にゼロに行くと思います。5年後には地理教員の半分が定年退職しているわけですから、もうすでに極めて危険な状況に陥っております。

（3）「求めるもの」と「求められているもの」との乖離

ひょっとしたら、地理教育が求めているものと地理教育に求められているものとに大きな乖離があるのではと考えました。

つまり、地理教育が、他科目の基礎知識としての地理ではなくて、独立した地理、自立した地理として自らを位置づけ歩んでいくためには、地理的な見方、考え方の指導を徹底せざるを得ない、特に平成元年版以降この点が強調されてきましたが、これは十分に理解できます。しかし、限られた年間授業時数の中で地理的な見方や考え方の指導に時間を割けば割くほど、いわゆる地理的な基礎知識などは生徒が自分で身に付けていくはずだと期待することになってしまい、高校生の学習方法としてこれが本当なのかという疑問が生じてきます。今の子供はそんなに学習意欲が高いのか、という疑問です。しかも、肝心の見方・考え方の学習自体が必ずしも徹底できていない、絶対的な授業時間不足の中でなかなか地理的な見方・考え方を定着させることができない現状においてです。

一方、地理に求められているのは、少なくとも国名、地名、気候、風土、産業、交通などの地理的な基礎知識の修得、つまり地名･物産の地理です。日常生活や大学教育において、地名･物産の地理が最低限必要な常識的な知識として求められています。それをきちんと教えておいてくれ、そんな基礎的な知識もない生徒を大学へ送り込んでくれては困ると言われているわけです。こうなると、地理教員としてはちょっと開き直って、世の中一般や大学がそういう考えであるとするならば、高校での地理は地理的基礎知識だけを覚えさせていればいいのかと反論したくもなります。

地理教員としては、地理的な見方、考え方の学習は極めて重要だと思うし、難しいが故に挑戦しなくてはいけないとは思いつつも、一方では、見方・考え方だけでいいのか、生徒は基本的な地名や位置すら分かっていないのに、そういった高校生や大学生でいいのか、この点は私自身の内部でも大きく分裂しています。例えば、小学校で「日本のデンマーク・安城」と頭から丸暗記していたことが、果たして正しいかどうかは別として、少なくとも安城とデンマークという地名、国名は頭の中に残っているわけです。それをやらなかったときに、どうなるのだろうか。地理教育が求めているものと地理教育に求められているものに大きな乖離があり、その間に落ち込んでいるのが地理教員ではないかなという気がしております。

高度な（？）普通教育としての高校段階において､「地理」では何を学ぶべきなのか。「高度な」に敢えてクエスチョンをつけました。これだけ高校進学率が高くなったときに、果たして高校が高度な普通教育なのかということには若干疑問があるところですが、ただ、普通教育として

地理は何を学ぶべきなのか、ここらの議論がきちんと為されなければいけないのではないかと、このままでは地理が求めているものも達成できず、地理に求められているものにも応えられない、そして最終的には高校から地理が消えていく、そんな危惧をひしひしと感じております。

以上、高等学校の地理教育が必然的にというか、結果的にというか、きわめて危機的な状況、悲惨な状況になっているという現状について、ご報告をさせていただきました。

ありがとうございました。(拍手)

【司　会】

どうもありがとうございました。我々が初めて知った高校教育、とりわけ地理という教科の置かれている状況を非常におもしろく拝聴しましたけれど、最初に言いましたように、皆様方から、何かここだけは聞いておきたいとか、もう少しあの点を伺っておきたいというようなことがございましたら、どうぞご遠慮なく。ございませんか。

【質問者】

応用生物科学部の岩本と申します。非常に興味深い、おもしろい話をありがとうございました。

私は理系出身で、先生が最初に理系だと地理をとるといいよと言われたのですけれども、私は世界史が好きで世界史をとってしまって、日本史も好きで日本史をとってすごくおもしろくて、地理は本当に苦手で、世界史とか日本史で学んで、例えば中山道が今の何々だとかといって思い出していて、それでもやはり旅行業界とか、色々なところで、世界の色々な地図が非常に売れている、ですとか例えば私、恥ずかしながらゲームとかよくするのですが、ああいう携帯型ゲームでは色々な地理の勉強をするようなものを持っていると。メディア的には、やっぱり学校を卒業した後、非常に重要で、興味のある部分だと思うのですね。

お聞きしたいことなのですけれども、僕が地理をほとんど受けていなくてこういうことを聞くのは本当に恥ずかしいのですけれども、先生もおっしゃった、ちょっと哲学的な、地理的な物の見方、考え方というものを簡単に教えていただけませんでしょうか。

【小山　徹氏】

そう簡単な話ではないのですけれども、結局、地理の特質である場所とか地球上の位置、さらには地域というものを前提にものを考えよう。この地域を考えるときには、じゃあその地域のセッティングの仕方が極めて大きな問題になります。どういう地域を考えるのか。大きい、小さい、組み合わせ等いろいろありますけれども、そこにポイントを置いて、位置とか場所とか地域から物事を見たり考えたりしていくのが地理だということです。

【質問者】

最近読んでいる塩野七生の「ローマ人の物語」という本の中で、アウグストゥスが防衛ラインをつくるときに、どういうふうな防衛ラインを引くだとか、そういうことなのかなあと思いながら聞いていたのですけれども、ああいう本をめぐっては地理学というのはすごいなあと思ったり、安全保障とか防衛とか、色々なことを考える際に、じゃあそういう考えを少しでも思っていればいいということですね。

【小山　徹氏】

塩野七生さんというのは、本当にすごいと思います。大好きです、僕も。

【質問者】

僕も感動して大好きなのですけれども、分かりました。ありがとうございます。

【小山　徹氏】

すみません、このお集まりの先生の中で、最新版とは言わなくても、例えばソ連邦の崩壊以降、もしくは平成の大合併以降の地図帳をご自宅に備えておられる方、どのくらいお見えでしょうか。挙手をお願いします。　ありがとうございます。

地理的な基礎教養というのがどこの部分を指すのかというのも、非常に微妙なところだと思うのです。私は、自宅のトイレに、世界地図、日本地図、岐阜県地図を張っております。これはもう子供が小さい頃からずっと、順に張りかえてですね。何とか子供たちに地理的な興味・関心を持たせたいと。しかし、子どもは３人が３人とも地理を選択しませんでした。他の親さんに比べればずいぶんと努力したつもりですが、色々なところへ連れていったり、地形図も見せたりしましたけど、結局、駄目でした。

【司　会】

ほかにどなたでも結構ですから、ご自由に。

富樫先生、どうですか。

【質問者】

地域科学の富樫です。僕も一応地理なので、我々の世代ですと全科目やってきた時代ですけど、こういう高校の状況というのはある程度我々も聞いてはきているのですけれども、実際に教養教育で、こういう部屋で１年生に人文地理なら人文地理を教えるとか、うちは工学部とか理系が多いですから、センター試験ではとってきていますけれども、文系はほとんどとっていないというのは今のデータのとおりですから、その原因はもう先生がご紹介くださいましたので特にこだわらないのですけれども、ただ、後で社会科学の部会の方からもレポートがあったり質疑が出るかもしれないのですけど、ほかの先生方もお感じだと思うのですけれども、大学に入ってきた高校生たちが、今の世界とか、アメリカでも、アジアでも、ほかの地域でも、それをあまり知らないというか、関心を持っていないというのは困るのですね。我々が当たり前のようにどこかの国の話をしても、ほとんどそこの国の歴史も地理も知らないのが現状ですから、そこで高校と大学の連携の話になってもどうしたものか、非常に困るというのが一面あるのです。

ただ、今のご質問のあった地理的な見方とか考え方もそうなんですけれども、今のプレゼンの中では高校の先生方の地域研究部会の活動のご紹介も少しあったのですが、やっぱり高校生でも大体地元の地域のことに関心があって、それを自分たちで調べたり報告したりするのを見ると、やはりそれなりにしっかりと興味を持って頑張ってやってくれるんですね。我々大学で学生たちとまちづくりのような形をやっていても同じことがあると思うわけです。ただ、それは当然地元だけではなくて、世界各地域でそれぞれの地域づくりやまちづくりがあるわけですし、そのためには、それぞれの国の歴史もあるし、自然環境もあるわけですから、何かそういうことを調べたり考えたりする機会ができないかなあと思うわけですよ。今はインターネットがあるんで、すぐ学生たちはウィキペディアか何かで調べて情報を持ってくるんですけど、当然それだけでは済まないわけです。それからもう一つ感じるのは、大学生でも旅行などでほかの地域に行ったり、最近海外に行く機会もありますので、卒論なんか書いた後にヨーロッパの都市を見て、初めてまちづくりとか景観ということの重要さがわかったりするんですよね。だから、もう少し見方や考え方、あるいは問題に対する関心・興味、それの引っ張り出し方はあるのかなあという気はしているんですけれども。

【司　会】

ありがとうございます。

ほかに先生方ありませんか。特に地理という立場からの物の見方、考え方という、この点についてはもう少し突っ込んでいろいろお話を聞きながら、ということを後でちょっとしたいと思っておりますけれども、教育学部の社会科教育の講座の先生、ちょっと私存じ上げておりませんけど、もしお見えでしたら、何か地理関係でお聞きしたいことがございましたら。お見えになりませんでしょうか。

どうもありがとうございました。また後程よろしくお願いいたします。

続きまして、第二部の方へ入らせてもらいます。

平成二十年度
岐阜大学教養教育
センター FD研究
『高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの』
元大阪市高等学校教諭（歴史）
所 文 健 氏

第二部　テーマ討論（高等学校の指導要領、履修形態などを知る）

高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの

元大垣北高等学校教諭（歴史）　所　　史　隆

紹介いただきました所ですけれども、一昨年まで大垣北高等学校で教諭をしておりました。その前は羽島北高等学校に勤務していました。大体羽島北高等学校の生徒でいうと、トップクラスの子たちしか岐阜大学に入れません。全体で国公立大学合格者が2、30名でした。その前は岐山高校です。その前が華陽高校、定時制高校でした。ほとんどの子は大学へ行きません。定時制高校の場合は最終学校です。そういうところで37年間教諭をやっておりましたが、ほとんどが日本史を教えていました。ですから、先ほどの話にもありましたけれども、3年生の担任が多いですので、最終学年の担任を何回も受け持っていて、いろんな生徒が岐阜大学へ入っております。

前置きはこれぐらいにしまして、14ページをご覧ください。

高等学校教育の現状という話をさせていただきます。

高等学校は、現在、普通科高校と専門科、いわゆる実業科の2種類あります。実業科、専門科というのは、工業高校、農業高校、商業高校、そういう学校です。それに対して普通科教育では何をするんだということですが、その学校の教育方針を見ていただければよく分かるのですけれども、教育基本法に則って、どこの普通科高校でも知育・徳育・体育が3本柱です。ですから、高等学校の校章を見ると、三角形の校章がよくあります。それはこういった教育目標に則って、知育・徳育・体育をそれぞれ伸ばしていこうという考え方からです。別の見方をすれば、文武両道、勉強だけではありませんよと、部活動もやりますよと。ですから、現在、私が最後に勤めました大垣北高校で言いますと、学校では文化祭、学校祭、今は学校祭の真っ最中です。(20年前に比べて時期が早まっています。)夜遅くまで3年生の子たちが応援等で頑張っておりますが、それから講演会、これも結構あるのです。日本の著名人を呼んできて、生徒に1時間半ぐらいの話をしてもらうとか、それから文化講演会だけでなくて、演劇とか音楽会とか、そういった情操教育の面でも毎年いろんなことをやっております。それから、夏休みが終われば、生徒は読書感想文を出してくれます。これは1・2年生です。そういったさまざまな活動をしながら、全人的な発展を目指して頑張っているわけですが、ただしそれらの中身であって、入り口と出口はなかなかそうはならないのです。

例えば、中学生にとってよい高等学校はどこだと。それから中学生に人気のある高等学校はどこだと。それは高校受験者数を見ればすぐ分かるわけです。岐阜県では高校の受験者数が定員を切りますと、再受験というか、もう一回試験をやるわけです。これはなかなかつらいものがありまして、3月はそれで没頭されますので。ですから、何とか定員以上の生徒が応募してくれて、そして何人かが落ちていくと。最近かなり落ちるケースが増えております。かつては高等学校の定員のプラス2、3名、進学校では大体2、3名しかオーバーしなかったんです。現在は40、50名とか、30名ぐらいは軽くオーバーしてしまいます。それは結局、岐阜県内に私立の進学校が出来てきたと。中高一貫校とか、いわゆる受験にシフトした、そういう私立の高等学校が結構新規にできてきて、例えば、卑近な例を言いますと、岐阜高校が落ちたら、そこへ行けばいいと。岐阜高校が難しいから、例えば本巣高校だとよ言われても、本巣高校へは行かない。落ちてもいいから、落ちたらそういう私立の高校学校へ行けばいいよというように状況が変わってきましたので、かなり普通科高校を落ちる生徒が増えております。

では一体最終的に中学校の生徒の地域や親さんのいう「いい高校」って何だろうと。中身です。例えば先程言ったように、読書感想文をきちんと書かせるとか、音楽会をやるとか、文化

祭をやるとか、様々なことをやっていく中で、最終的に今の岐阜県の現状で言うと、国公立大学への進学実績、これが一番です。ですから、高等学校の教員は、時々よその高等学校へ訪問に行くわけです。現状を視察してみて、自分の学校に何か参考になるものはないかということで、学校訪問をするわけですけれども、そういうときに、ベネッセが出している国公立大学の一覧表というのがありますけど、それを見て、他県の例えば今度は長野県へ行こうと。長野県へ行って、さあどういう学校を見てくるかと。自分のところの学校よりも少しレベルの上の学校などを参考にすればいいのではないかと、そういう考え方で出しますけどね。ベネッセの本を見て、例えば国公立大学に何名入っているか、東大へ何人受かっているのだと。そういう形で、国公立大学の進学実績で、不思議ですね、これが。なぜか国公立なのです。私立ではないのです。例えば難しい早稲田、慶應も、応募者数が何人とか、そういうことはまずないのです。ですから、国公立大学にどれだけその学校から出しているか。例えば大体 20 名ぐらいか、50 名ぐらいか、100 名ぐらいか、200 名ぐらいか。東大へ何人入っているのだと、そういう進学実績を見れば、学校のレベルが分かるわけです。

こういうように、現在は、多分岐阜県の大多数の教員、それから岐阜県の地域の親さん方はそういうように見ているのではないかと。ですから、勢い高等学校としては、国公立大学へ何人出したということが大変大きなウエートを占めるわけです。それが一番ですが、中身は、本来の高等学校で教員が考えているこういう生徒を育てたい、それが教育目標に書いてあるわけです。それがもちろん校訓にも出ております。大垣北でいうと「誠実・友愛・努力」と。真面目に一生懸命努力して、みんなと仲よくやりなさいよと。そういう人間をつくりたいのだという教育目標を掲げているのですが、現実には地域とか親さんの様々な圧力等があって、国公立の進学実績を上げなければならないと、そういうことに一生懸命日夜努力するわけなのです。

2 番目、カリキュラム。先程も話がありましたように、このカリキュラムというのは、高等学校教育の各学校のカリキュラムを見れば、どういう生徒を育てたいか如実にあらわれているのがカリキュラムなんです。時間割でございます。これは先程から話が出ていますように、学習指導要領が一番大きな要素です。地歴で言うと、先程から出ていますように、現代社会、これが諸悪の根源です。これが 1 年生に入ってきたおかげで、しかも必須ということですから、1 年生でどうしてもやらなければならない。そのあおりを一番受けたのが地理です。1 年生でかつては地理をやり、2 年・3 年で社会科が積み上げていたものが、一挙にここで崩れたわけです。そういう文科省の学習指導要領、それを受けて、当然岐阜県の教育委員会もそれに基づいて各高等学校に指導します。それから各学校の目標ですが、例えば羽島北高等学校で言うと、全員に国公立を目指せというのは無理でございます。全員の生徒に、努力すれば必ず成果が上がるよといって、300 名程の学校で 20 名ぐらいしか国立へ入れない学校で、全員の子にそれを教えようとしても無理でございます。ですから、どういう学校でどういう生徒を育てたいのか。勢い、学校によっては、うちは全員行かせるのは無理だから、特別なクラスを作ろうと。そういうさまざまな学校で、自分のところの学校のレベルに合った、生徒の学力に合ったカリキュラムをどう作るか。さらに大学入試です。この三つがそれぞれ相まって、カリキュラム委員会というものがあって、そこで各高等学校のカリキュラムを決めるわけです。

先程から話が出ていましたように、学校長、それから教頭、教務主任、それから進路指導主任、各学年主任、そして最後が教科主任、この委員会は各教科のある意味では分捕り合戦です。どれだけ地歴・社会科で 3 年間で時間数をとれるか、そういう分捕り合戦ですが、そこで一番大きな影響力を持っているのが、実は大学入試です。大学入試の合計得点科目が 1 次と 2 次、地歴でいうとほとんどが 200 点で終わりですね、文系で言いますと。理系ですと 100 点しかないです。ですから、2 次科目がない以上、文系では英・数・国の次に社会が来ると。2 次がないというほとんどの国公立大学、先程出ていました、いわゆる超難関大学、東大から名古屋大学までのレベルで言いますと、2 次に地歴がありますから、まだ発言権があるのです。でも、

ほとんどの国公立大学はありません、社会科は。ですから、1次でもう社会科の試験は終わりです。1次が終われば、あとは生徒は2次対策ということで、社会科の教員はもう出番がないということです。

そういう1次、2次の合計得点が何点か。やはり英・数・国が一番メジャーです。ですから、地歴でいうと、なかなか発言権がないです。今で言うと、1年生で現代社会2単位でいいよと。4単位あったけれども2単位でいいのか、岐大に行けないと、そういう圧力がかかるわけです。本当に学習指導要領が変わって、各学校のカリキュラムをどうするかというときは胃が痛いです。何回も何回も会議をやるのですけれども、声は、社会科は最低でいいよという話になってしまいます。それから、週当たりの時間数の多い少ない。例えば同じ地歴でも、地理を週2単位やるのか週3単位やるのかによって、受験の関係でできる範囲が変わってくるわけです。ですから、どの教科担当の先生方も、何とか時間数を増やしたい。それが一昨年起きた例の未履修問題になってしまうわけですけれども、要するに週2時間よりも3時間の方が学力がつけられるのだと。3時間より4時間の方がいいのだという、一種の神話みたいな話がありまして、何とか時間数を多くとりたいというのが、どの科目教科の先生方もお気持ちとしてあります。

そのカリキュラムができますと、それによって実は各教科の教員の定数が決まるわけです。時間数によって、例えば数学はこれだけ時間数があるから、それに対して定員が何人と。ですから、今は大概の進学校では、英・数・国の先生が一番多いです。その次に理科、その次に社会。5教科の中で社会科の教員数が一番少ないです。それは時間数が少ないからです。ですから、勢いバトルになってしまうのです。

それから2番目、文理コース。これはほとんど2年次から文系・理系を分けます。これは大学入試の関係もあって、文系の方からの要望じゃなくて、理系の方の要望です。2年次から分けてくれないと、例えば数Ⅲはやれないよとか、物理がきちんとやれないよと。だから、1・2年までベターで、共通履修でいって、3年次だけ文系・理系に分けると。私が巣立った学校はそうでした。私は1・2年まで共通でいて、3年だけが文系・理系に分かれた、こういう世代ですけれども、とても今はそんなことを言っておれません。ですから、1年生の段階で、あなたは文系、あなたは理系と決めるわけです。大垣北高校ぐらいのレベルでいうと、迷っていたら理系。はっきりしている人は文系・理系それぞれ。迷っている人は理系。理由は簡単です。文系から理系へは変われません。けれども、理系から文系へは転換できます、本人の意思で、です。数Ⅲをやっても、数Ⅲを使わずにいればいいわけですから。ところが、文系へ行っていって、突然3年生になってから、おれは工学部へ行くといっても、これは無理です。ですから、迷っている子は理系。北校ぐらいの進学校でいうと、ほとんどは理系の方が多くなってしまうのです。それから羽島北高校ぐらいまでいきますと、もうこれは圧倒的に理系です。理系の方が国公立が受かりやすいですもの。文系の方は受かりにくいです。ですから、そういうようなことで、文理のコース分けでいえば、2年次からやっております。

それから、週当たり時間数が今はかなり減少しています。それは週5日制になったからです。かつては34時間ありました。隔週で32時間が、現在は30時間です。それにプラス総合とか家庭科の男女共修とか、情報とか、いろんな科目が増えてまいりました。ですから、最低限それだけ時間がとられますから、勢い、時間数が減ると。減ったらどうするのだというと、7時間目を設定する。50分授業を6コマ行い7時間目を設定して処理するとか、50分授業でなく、60分授業で6コマ、すると1日360分出来るんです。5時間で7限行っても350ですから、一コマの時間数を増やすのです。時間数が増えるとか、それから、1単位の年間時間数35時間を確保する。これは、かなり大変です。週1のものを35週授業をするわけですから。ですから、今の進学校では、ほとんど8月1日から8月の22、23日で夏休みは終わりです。夏休み、春休みはかなり減りました。さすがに冬休みはあれ以上減らせないので、冬休みはあまり減らせませんけれども、夏休み、春休み、こういうところはほとんど縮小傾向です。それから土曜

日を何とか活用できないかということで、補習とか補講という形で、何とか遅れを取り戻したい、こういう対策を行っているわけです。

では3番目、そういう中で社会科のカリキュラムですが、高校生にとっての社会科というのは一番嫌いな科目です。「何でおまえ嫌いだ」と言うと、「覚えなあかんで」と。あんなにたくさん覚えることは、とてもじゃないけど出来ません。考えるわけでもなく、ただひたすら暗記するだけだと。こんな教科は嫌いだと言うのです。小学校、中学校までは結構社会科が好きな社会科オタクの子供たちもいるのですけれども、高等学校へ行くと、まずそういう子は皆無です。膨大な量を覚えなくてはなりません。これは普通科だけではありません。実業科の方においても社会科は嫌いです。社会科が好きという生徒は本当に最近いないです。

それから二つ目は、社会のグローバル化の中で世界史が必修になりました。これはやはり社会科に現代社会ができて、大きな問題を提案しましたが、それと同じくらい社会科の世界史必は大きな問題を生みました。グローバル化の中で世界に進出していくには、自国の歴史よりも、世界史が重要である。実業高校では、世界史が必修になる以前から歴史は、専門科の時間数が半分ありますので、普通科の時間は半分しかありませんので、そうすると、勢い実業高校では昔から割と世界史の選択が多かったわけです。日本史よりも世界史の選択の方が多かったのですけれども、普通科高校の方へグローバル化の中で世界史が必須ということで、しかも、今、大学の受験科目でA科目とB科目と。要するに週の単位数が、2単位がA科目、週4時間がB科目。B科目はほぼ受験に対応する。ですから、A科目を選択するというのは、学習指導要領で必須ですから、やらなければならないのでとるけれども、それは最低限でいいですよと。ですから、A科目をとったという段階で、そのA科目はもう受験科目からは外れる、こういうことが言えるのです。ですから、例えば理系の方で世界史を選択すると、それ以外にもう1科目選択しなければならない。もう1科目、日本史か世界史のAをとればいい、こういう問題が出てくるわけです。文系の方でいくと、例えば2年生で世界史と地理と、これは少数派です。ほとんどは日本史・世界史をとるわけです。日本史・世界史をとって、好きな方、得手な方、得点が高い方を3年で1科目に絞る。ただし、カリキュラム上はどうしても世界史が4単位のものについては、2年生で世界史を、大概今の力関係では日本史・世界史が2・2、それで4時間。もしくは2・3、社会科の配当時間は5時間が限度です。ですから、2・3で来ると、2年生で世界史・日本史の履修をするわけですけれども、3年次のときにそれが一つに特化した、要するに受験科目は一つでいいので、結局は一つにしたい。ところが、カリキュラム上では、学習指導要領の中ではどうしてももう1科目世界史をやらなければならない。日本史を選択した子は世界史をやらなければならない。

実は3年生になってくると、ほとんどの進学校は、ほとんど受験シフト、生徒や親の気持ちをも尊重しなくてはいけない。ですから、何とか夏までぐらいまでに、私も理系の政治・経済を教えたことがあります。そうすると、何とか夏までは生徒に興味を引きつける現代社会的な政治・経済をやっておれば生徒は追いてくるわけです。ところが、9月に入ってくると、ぽちぽち生徒が私のところへ来て、「先生、私、受験科目に政治・経済はないのですけど」と、ぼそぼそっと来るわけです。じゃあ来週あたりからは好きにやっておれと。結局その段階まで来ると、強引にカリキュラム上授業も2単位になっているし、2単位やるんですけれども、生徒の気持ちを考えたとき、現状は、ちょっときょうは無駄話をするよとかいって、イランの問題だとか、きょうはちょっとタリバンの話をするよと言うと、そのときだけ生徒もぱっと顔を上げるわけです。そして10分ぐらいそういう話をフーンと聞いておるわけです。その話が終わって、さあ授業をするよと言うと、内職を始めるわけです。そういう現状を見ていますので、受験科目にない3年生、特に9月以降の授業をとるのは本当に厳しいわけです。ですから、社会科の教員の中で、それくらいなら生徒の希望を入れて、例えば世界史というカリキュラムの授業の中で日本史をやってしまったらどうだと、こういうことになるわけです。ですから、そ

の辺が皆さんにはどうしたらいいかと、そういうことです。そういう中で、何とか世界史必修というのを外せないか。これが指導要領にあるのでどうしても厳しいわけです。

それから、受験の日本史ですが、後でまた教科書等を見ていただきますが、細部にわたる歴史知識の必要性から、膨大な量の暗記科目となっています。ただし、知識がないと論述もできません。現在、センター試験しかない国公立大学にとっては、要するに、社会科、特に日本史は暗記科目です。はっきり言いに来る生徒もいます。「先生、日本史って暗記だよね。ばかでもできるよね」とか言ってね。そういうことを言いにくる子もいます。「おまえら、だれに向かって言っているんだ」と。「先生は日本史の先生かあ」、「おれはばかか」と冗談を言っているのですけれども、とにかく 8,000 ぐらい用語を覚えなきゃセンター試験には対応できません。英語の単語が、ここの中で英語の先生がいらっしゃると思いますけれども、私の記憶では 5,000 から 1 万、大学によって単語の数が変わると聞いておりますけれども、大体センター試験に間に合う 8 割ぐらいを覚えさせようと思うと、8,000 ぐらいの用語です。これをマスターしなければいけない。ところが、文化史の授業でやっていますと、鎌倉時代の新仏教なんてやっていると、1 時間で 60、70 の用語を覚えなければならないのです。それだけの膨大な量を本当に覚えさせる必要があるのかということです。

本来、日本史というのは、日本という社会がどのように変遷・発展してきたかを理解し、いわゆる「温故知新」ですね、これからどこへ行くのかということを考える、そういう教科だと思っているのですけれども、なかなかそこまで行きません。特にセンター試験だけを考えると、なかなかそうはならないわけです。最終的にはセンター試験の点数アップ。これが平均点、何とか 75 点ぐらい取れないかということで日夜努力しているのです。

次のページに行きまして、日本史ですけれども、大垣北高校でいうと、2 年次で週 2 単位、実時間が 65 時間授業をやっています。プラスまだ 4 時間ぐらい、試験等もありますので、実時間で追っていって、時間数を確保しようとすると、大体 35 週は必要となります。ですから、年間で実授業数は、一昨年は、私のときは 69 やっておりました。それから 3 年次は、一応 11 月までですね、計算してみると。11 月までで、今のところ 1973 年のオイルショックまでは何とかやり切ろうということで努力してきたのです。11 月の終わりに、大概進学校では 3 年生の考査、学年末考査というか卒業考査をやって、それ以降、12 月から 1 月は何をするかといえば、センター試験の過去の問題です。だから、過去の十数年分のセンター試験問題を全部やって、これを合格ラインまで持って行くのです。ですから、この問題演習のために 12 月、1 月は授業ではなく演習です。3 年生の授業というのは、実質は 11 月の、22・3 日でもう終わりなのです。そこまでの時間しかないので 100 時間。ですから、週 4 単位、そして 2 年生で 2 単位、合わせて 6 単位です。本来は 4 単位でやる教科書ですが、実質、北高でいうと 6 時間、6 単位やっているのです。それで何とか 11 月の終わりで、必死にやって 1973 年まで。となると、勢い教科書は 320 ページぐらいある。今、大概高校の地歴の方でいいますと、教科書、史料集、それから図表、これは図や資料があるのです。この 3 点セットで授業を教えているわけです。大体教科書でいうと山川です。ですから、教科書が諸悪の根源です。山川が進学校でいうともう 90 何％の占有率です。まさに独占資本です。学校毎に一応選択ですけれどもね。実業高校とか、国公立になかなか入っていけない学校でいうと、山川以外の教科書、私はほかの教科書が好きで、そういうので教えるのですけれども、進学校へ来ると、山川を使わないというだけで、先生は地域からも親からも、ほかの教科の先生方からも「何をしているんだ」と非難を言われますから、山川への圧力はすごいものがありますね。実際、センター試験に山川が結構出てくるのです。そういう教科書と史料集と図表の 3 点セット。大体 1 時間で 3 ページぐらいは進んでいくのです。当然 3 ページ教科書を黒板に書いて一々やっていたら、とても時間が足りませんので、勢いプリントで対応すると。私の場合は、始めは好きにプリント作成してやっていたんですけれども、そのうち教科書に準拠する。生徒も、今は高等学校の教員

を生徒が評価します。前期が終わると、1年を終わったところで生徒が高等学校の教員を評価します。日本史、特に私なんか良くなかったです。まず板書が汚い。それから、よく分からない。脱線が多過ぎる。私はが大事なことをしゃべっていても、生徒には受験に関係ないから脱線ということです。ですから、例えば鎌倉新仏教でいうと、座禅の話をすると、先生、そんなことをやっておらずに早く教えてとか、要するに、座禅というのはこういうものだということを教えたいと思ってやったり、そういうことを実際にやると、生徒は聞いていない。一部にはファンがおりますけれども、大多数の生徒からは総スカンです。そういうプリントを使って授業せざるを得ない。ですから、ほとんど教科書を読めば大体プリントの答えが出てくるということです。

そんな実例として、16、17に教科書のプリントを2枚。例えばこういう形で、教科書はその後ろ、18、19、20、21と。この教科書に基づいてプリントをつくり、そのプリントの中に私の言いたいことも少しは入れ込んでやっていくと。左の方は教科書を見ていけば各答えが分かると。これも生徒は、「先生、答えは」と言うのです。「探せ」と言うのですけれども、教科書の穴埋め問題は、教科書を見れば載っているのですが、生徒は早く安直に答えを言ってくださいと。

右側が私がいろいろ脱線するときに使うネタのところです。例えばそこでいきますと17ページです。鎖国体制を敷いている中で必ず出てくるのが島原の乱です。島原の乱と大垣藩との関係で、実は大垣へ入城して間もない戸田という藩主、この大垣藩主が島原の乱に行っているのです。島原の乱で活躍して帰ってきて、大垣藩の基礎ができ上がった、私はそういうように大垣藩を見ているのですけれども、そういう話をしていくと、生徒は、うれしがる生徒と、余分なことをやらずに早く教科書の答えを言ってくれとか、露骨にそういう顔をする生徒もおります。

とにかくこれだけの教科書の量を、18ページから19、20、21と、この教科書をプリントにして、大体これで2時間です。例えば私のプリントでいうと、16ページ、9のプリントには、鎖国制度、この江戸幕府、徳川の幕藩体制が鎖国をした理由を二つに大きくまとめております。そこまでで大体1時間は終わってしまいます。2時間目から始まるのがその次です。ですから、例えばこの2時間目、15ページのところに書いておきましたが、鎖国へ至った理由の復習で、大きな理由、いわゆる貿易・経済の問題とキリスト教の問題、これを復習して、それでは鎖国へ至った過程を見ようということで、史料集で、鎖国令のⅠ、Ⅲを使います。これは史料集を使いますけれども、史料集の23、24番目のところを使って、鎖国令を配布して、10分では無理ですから、主な生徒に当てて、組織もまぜて、全部意味を言わせてやりたいのですけれども、とてもそんなことをやっている暇がありませんので、史料集を見なさい。または、何ページ、ここに線を引きなさい。大事ですよと。

大体の史料集とか教科書に載っている史料というのは、センター試験で出てきたら確実に得点を取らなければならない。生徒に、見たこともない史料問題が出ていたら、逆にラッキーだよと。だれもやっていないのだから、これはどこかポイントがあるに決まっていると。今の高校生に見たこともない史料を全部読ませて意味を分からせて、そして答えを書く、そんな問題は出ないよと。必ずどこかにワンポイントがあるのだと。そのワンポイントさえ探せば、これは何の史料だと。何の史料だと分かったら、学習し知っている用語が出てくれば、これは○○問題だと。用語一つが解れば解ける問題だよと。史料を読まなくていいよと。だから、どこかにワンポイントがあるから、そのワンポイントを探せと。ところが、教科書や史料集に載っている史料は、必ず難しいところが出てくるから、きちんとやっておかないと点が取れないです。ですから、史料というのは、そうそう疎かにできないのですけれども、その史料集を読み返して、史料の解説をして、重要なところをピックアップして、そしてⅠとⅢの違いはどこだと、そんなことをやっていたら、とても10分程度では間に合いません。そして島原の乱へ行って、

鎖国政策のところ、これも史料を使います。こういう史料集を使い、そしてさらに後は長崎貿易、朝鮮、琉球、蝦夷地、これだけ項目がありますから、それを5分ずつです。そうすると、これだけの内容を1時間でやるのはとても無理です。例えばプリントに番号を打っておきましたが、この時間にやる歴史用語としてざっと見て40あるのです。これだけのものを理解させて覚えさせるわけですから、とても間に合わないのです。

それから、当然史料をじっくり読む時間的余裕はありません。それから、板書でどうしても書かなければならないのは、対馬と琉球と蝦夷の位置です。これは板書にきちんと書きます。蝦夷とはどこだ。どこからどこまでが蝦夷なんだと。時々ここで脱線して、北方領土に行ってしまうのですけれども、一応地図を確認。それから対馬、これも確認。琉球、沖縄、ここもきちんと確認。ですから、そういう板書をやって位置を確認していく。本当にこれだけの知識が大学に必要なんでしょうかと。高等学校では、現在、中学校でこういう勉強をしてきた、ここまではもう知識があるはずだというような形でカリキュラムを作っておりません。ですから、何も習わない、何も知らない、ゼロという形で授業をやるんです。1から全部授業をやる。

例えばさっき方話がありましたけれども、大垣北高でいうと、2年生から日本史は始まるのですが、3月の春休みに、課題を与え、第1時間目の授業で、国の名前の試験をやるのです。これは社会の授業で旧国名ぐらい知らないのでは困るということから、授業の前の1時間で試験で確認しています。ですから、そういう形で、高等学校の教員は、中学校がたくさん積み残ししてくれたおかげで、こんなことは知っているだろうというような論は出ません。ですから、1から全部教え込むと、こういう考え方をしておりますね。

では、本当にこれは必要なのかと。本来なら、例えば大胆に言えば、長崎貿易、朝鮮、琉球、蝦夷地、ここは全部カットしたいのです。カットして、そこまでで1時間ゆっくりやりたいのです。そうすると鎖国の意味も分かるし、鎖国へ至る道がどういうようだったのかということがよく分かるもので、大変参考になると思うのですけれども、残念ながら教科書は、長崎貿易、朝鮮、琉球、蝦夷地。昔の生徒だったら、プリントを渡すからやっておけと言っておけば済んだのですけれども、最近の生徒はここまできちんとやってあげないと、なかなかついてこれない生徒が多くなっております。ですから、本来ならそこまでやらなくてはならないことはないと思っているんですけれども、一応は、網羅的に全部を授業しておきたいと。

ですから、結論から言うと、センター試験がもう少し易しくならないのか。大体、日本史の平均点は60何点から50何点です。なかなか日本史では、点が取れず、日本史と現代社会の組み合わせとか、日本史と倫理でいくか、日本史と政経でいくか、世界史と倫理でいくか、要するに二つの組み合わせです。これで平均点が例えば15点違ったら、岐阜大学、変な話、落ちるか落ちないか決まってしまうのです。ですから、どの科目をとって地歴・公民の2科目をとるかということは、生徒にとって切実な問題なんです。ですから、何とか平均点をもう少し上げる、そういう問題を出していただかないと、とても高等学校ではこういう授業しか展開できない。唯一救いは、2次科目のある大学を受験してくれる生徒です。この子たちとは、センター試験が終わって、2月が大体一月ありますね。2月24、25日までありますので、その間の1ヶ月間に、やはりいい問題ですね、考えさせる。要するに文章題ですから、論述問題ですから、生徒はそれを考えて、自分の今まで学んできた知識を使っていかに論を組み立てるかという、その態勢に入る。この2次試験の対策というのは、私も生き生きする。本当に難しい問題を出してくれますので、2次対策というのは、生徒も最後の試練と思って、とにかく必死ですからね。ですから、そういう中で、ある意味では、2次試験を各国立大学に課してくれたら、もう少し社会科の教員が増えるかもしれない。また、もう少し楽しい授業ができる。1次だけなら本当に暗記だけだよ、覚えなくてはらないよというだけですから、難しいかとは思いますけれども、今のセンター試験ではマーク方式という方式を採用している以上、どうしても高等学校サイドから言うと、知識、無論知識は要りますが、多過ぎるのです。木ばかりで森が見え

ない。だから、全体像がなかなかつかみ切れない。個々の知識はかなりある。私たちの頃に比べれば、今の高校生の方が遥かに基礎知識は多いと思う。ただ、それが残念ながら、組み立てるとか、構造上なっていないわけです。だから、個々の知識は、結局そればかり詰め込むわけですからね。これだけの問題を本当に生徒が１ヶ月ちょっとでやってしまうのですから。これは日本史だけではありません。当然国語も英語も数学も全部あるわけですから、そういうのを生徒は営々とこなしていくのですから、昔の高校生に比べると、遥かに今の高校生の方が個々の知識は多い。ただし、残念ながらそれが組み立てられない。ですから、当然大学はあえて論文は書かない。それはある意味では、私たちの高校生でもそうでした。大学へ行って、レポートを書く上の指導をし、最初の４月、５月の連休からです。そういうように成長してきた覚えがありますが、当然大学生たちは、今の高校生から、超難関大学、東京大学は２次対策でやっていますから、１ヶ月間論文を書く訓練をします。ですから、かなりそこで学生は伸びるのですけれども、２次試験がない国公立大学にとっては、当然ながら、書くという練習をしてきませんので、英語とか数学とか、岐阜大学で、二次科目がない社会科にとっては、まずセンターが終わると大体それで終わりですから、そういうような形で、できたら全国国公立大学は２次試験を課してくれたらありがたいというように思っております。以上です。（拍手）

【司　会】

本当におもしろいお話でした。

どうぞお聞きになりたいことがございましたら。

【質問者】

留学生センターの森田です。日本の文化史を専門としております。

大学入試の話が出てまいりましたが、私はちょっと事情がありまして、一昨年ぐらいに大学入試問題を集中的に解いたことがあります。しかし、その場では解けず、調べても解けず、専門家に聞いても解けずということで、結局解答は分からなかったことがありました。大学入試問題にはそういうこともあると思います。

そこで、数点お伺いしたいのですけれども、Ａ科目とＢ科目の教科書の違いが出てまいりました。Ｂの教科書はよく見るのですけれども、Ａの教科書ですが、このＡの教科書は、項目とか時代を、どこか集中して作られているのか、というのが第一点です。

それから、次は、時間数が限られている中で、日本の原始、古代、中世、近世、近現代と通史の形で教えておられると思いますが、時間数が限られている中で、例えば近現代史から始めるとか、そういう工夫などはされているのですか。もちろん歴史の発展をトータルに通史の形でとらえることは大切なことだと思うのですけれども、そういうことが求められているのかいないのか、今それは必要なことなのか必要でないのか、という点です。

また、教科書 320 頁について、１時間で２～３ページの進度ということなのですが、特に時代的に重点的に教えるところがあるとしたらどこでしょうか。

もう一つ、留学生センターでは、留学生に対する文化史を教えていますけれども、特に近現代史の授業で、アジア・太平洋戦争の問題などをあえて取り上げることにしています。ある国の学生たちは一面的な見方で感情的になることが多いのですけれども、ここに別の地域の留学生が入ると様々な議論が可能となってきます。実は岐阜大学の学生をそこに入れたらどうなるのかという、そういう試みを考えています。近現代史の扱いに関して、高等学校で教えてこられた立場から、どうお考えかという問題。まず教科書の点とそれから近現代史の扱い方、その二つの点はどうでしょうか。

【所　史隆氏】

教科書ですが、Ａ科目というのは、最初文科省での説明は、私の認識の中では、近現代史を重視するというように聞いておりましたが、実際の教科書は、普通の教科書はＢ判サイズです

が大抵Ａの教科書はＡ判サイズで、図案が多くて、文字が少なくて、一応現在はすべて網羅しております。ただし、どちらかというと、最初の説明にあったように近現代が多いです。それがＡの教科書です。当然これではセンター試験に間に合いません、残念ながらです。

それから、近現代史から授業をしたらどうかと。実は私やったことがあるのです、何回か。例えば近現代史ということで、私、実は専門が明治維新でしたので、明治維新から始めるわけです。明治維新からやろうと思うと、どうしても幕藩体制をやるわけです。幕藩体制をやらないと、明治維新とか近代の勉強ができないということで、幕藩体制をどこで教えるかと。教えて、夏までぐらいに大体終ってしまうのです。9月から、どこから入るかと。古代から始めるのか、戦国時代くらいからもう1回始めるのか、それとも、結局3回ぐらいやった当時の例では、秀吉の太閤検地のところです。江戸時代幕藩体制下から遡るのはかなり難しい。ロスが多いです。ですから、限られた時間の中で、近現代史から始めたことが3回ぐらい経験しましたけれども、かなり難しい。ですから、やっぱり順番にやっていくというのが一番合理的かなというようには、今思っています。

それから、教科書の重点ですか。

【質問者】

限られた授業時間の中で、特にどの時代に関して重点的に行うのですか。

【所　史隆氏】

ありません。それはないです。ただし、あるとすれば文化史です。例えば鎌倉時代で言えば、政治史や経済史は省けないし、特定時代を省くことも出来ないけれど、そういうことはやりません。文化史しかもうできないです。やってみると、文化史は、私の認識が甘いのかもしれませんけれども、今の高等学校でいうと、ここでは流れがそう重要ではないし、省くとすれば、薄くするとすれば、もう文化史しかないです。多分、暗記が基本で、覚えておいてねで、済ませがちです。鎌倉、室町とか、江戸の最後の文化史。文化史の部分については、時間がどうしてもなくなればそうなりますね。でも、最初から意識的にこの時代とか、ここを厚くしようという形ではやらないです。

それから、近現代史で靖国、いろんな問題があるのですけれども、私は自分なりにはその辺のところはきちんと教えているつもりですけれども、ほかの教員はなかなかそうはいかなくて、多分生徒にしてみれば、靖国の問題とか、朝鮮のいろんな問題、植民地支配とかについても、知識としてはあっても、それがどういうものかというのは認識がないので、そういう留学生たちと交流するときは、日本の学生の側に、驚いたり、自国を卑下したりする場合が多いのではないかと。最初は当然衝突するかもしれない。ですけれども、そういうことはやっておかないと、これからの世界に羽ばたく日本人としては、必要な知識で、私は個人的には高等学校でそういうことはやってきたつもりですけれども、生徒に聞くと、なかなかそういうのは耳に残っていないんです。ですから、個々の教員がそれなりに努力して、そういう問題について、今の創氏改名などについて、朝鮮の問題としてかなりやるのですけれども、そのことの意味が、なかなか生徒の頭に入っていかないのです。自分の名字がそのまま使えないので、訳の分からない、字になったら、どう思うのかという問いかけをしているのです。なかなかこちらが思うような反応が返ってきません。今は致し方ないのかなと。大学でもそういう現実に、立って対処していっていただきたい。

岐阜県の高等学校にも留学生は来ます。特に大垣北には毎年来ているのですけれども、残念ながらアジアの子は少ししか来ないし、まして中国や朝鮮の子は来ないので、来るとすれば、タイとか、東南アジア方面ですので、あまり差別とか偏見はないので、日本の近代化の中で朝鮮や中国について、しっかりした知識や認識が充分教育されていないですから、大学でもそういうように考えていただいて、色々な形で交流していただければいいのではないかと思います。以上です。

【司　会】
ほかにいかがでしょうか。
【質問者】
私は物理学で、理系なんです。お話は非常によく分かるといいますか、私もそういう経験をした記憶があるのですが、私も高校の生徒のときはそうだったのですが、やっぱり少しでもいい点を取るためにはどういう勉強をしたらいいのだろうというようなことで、やはり知識を一生懸命詰め込むんです。私は地理と世界史を勉強したのですが、何となく今の話をずっと聞いていますと、結局大学入試で問うている内容というのと、いわば高校で、例えば社会でいえば社会で教育したい内容というもの、あるいは身につけてほしい内容というのがやはりかなり乖離していて、その大きな乖離があるということが非常に大きな問題になっているのだと思うのです。そういう点でいうと、入試の方がもう少し変わらなければいけない。先程入試で問うべき内容をもう少し簡単にせよとか、記述式とかとおっしゃったのですけど、もう少しその辺を具体的に、入試のあり方といいますか、例えば入試問題をつくるプロセスであるとか、僕はやはりもう少し高校の先生が自分たちの教育目標に合わせた問題を本当はきちんと作らなければいけない。入試そのものが、非常に極端なケースとして、あまり多くの知識を問わないとしたら、非常に変な話ですが、例えば教科書持込みを許すとか、極端に言うと、知識を問うのではなくて、高校で教えたい、あるいは身につけてほしいものをしっかり入試でも問うというような形にしていくのがやはり非常に大事ではないかというように僕自身は感じているのですが、何かその辺、入試のあり方についてもう少し何か感じておられることがあれば、言っていただければと思いますが。

【所　史隆氏】
入試に関しては、先程少し言いましたように、やはり教科書会社です。一番ひどいのは現代社会でした。大垣北高校では現代社会を入試にするのはやめにしようとしました。現代に関する問題は何を出しているんだと。正直、私も 5、6 年必死に現代社会に取り組み、政治経済に取り組んだのですけれども、ここ 2、3 年、現代社会、とてもじゃないけれども点数が取れません。日本史は大体 95 ～ 96 点取る自信はあるのですけれども、現代社会というと 70 行くか行かないか。でも、僕が教えた生徒がそれで 90 何点取りますから立派ですよね。それから現代社会は、やっぱり教科書から出してほしい。とりあえずセンター試験は教科書以外からは出さないという枠をはめていただかないといけない。教科書以外から出すということになると、もう何を出してもいいということですから、どんな瑣末な問題でもできますからね。ですから、さっき説明した鎖国のところで、過去 10 年間、センター試験で鎖国問題がどれだけ出たか。ちょうど 11 回です。2 問出た年もありまして、1 問も出ない年もあります。しかもそれが、私が数えたら 44 項目です。これだけは覚えてほしいと思っている歴史項目（約 8,000 語）の中に入っていないのが 2、3 あるのです。ですから、膨大な量です。地理は 5,000 ぐらいですか、知識として。あとはグラフを読み取る力とか、地図を読み取る力とか、そういうのでカバーできるのですけれども、日本史は 8,000 ぐらいですから、これだけの量を覚え込ませるために、生半可なことでは生徒は覚えられません。ですから、とにかくセンター試験をもう少し高等学校サイドから問題を作る人を選べば一番いいのです。高等学校サイドからセンター試験の問題を作るようになれば、もう少し高校生の現状に合った問題を出せると思いますけれども、とてもじゃないけれども、今のままでは無理です。ですから、もう少し森全体を見るような生徒を育てたい、そういう生徒が欲しいということであれば、2 次科目で課すしかないと、今の制度の中では。教科書を持ち込んでも、結局はセンターのマーク方式になってしまいます。全国の受験生がセンター試験を受けるということの中で記述だともう間に合わない。だから、あの方式しか無理だろうと。あれだけ全部、受けるのだったら。さらに得点をすぐに生徒に教えてくれればいい

んでしょうけれども、なかなか教えてくれないのが少し欠点ですけれども、そういうふうに思っています。

【司　会】

ほかに、聞いておきたい、どうしてもという方がございますか。

私の不手際で時間がどんどん進みまして申し訳ありません。

続いて、国語教育を担当されてます奥村先生からお話を伺いたいと思います。

今回３人の先生方は、くしくも、たまたまなのですが、大垣北高等学校という進学校で教鞭をとられていた方々です。

第二部　テーマ討論（高等学校の指導要領、履修形態などを知る）

高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの

岐阜県教育委員会教育研修課　課長補佐　奥　村　哲　也

お疲れのところすみませんが、もう少しおつき合いいただきたいと思います。

今、紹介がありましたけれども、実は私は長期研修で、こちらの大学院に平成13年、14年と学ばせていただきましたので、恩師の方がたくさんいらっしゃって、大変その点では話しづらいわけですが、不十分なところはまたご質問等をいただければと思っています。

それでは、レジュメの方は28ページです。「高等学校教育の実情」としました。「大学へ望むこと」というタイトルでは、私はとてもお話しできませんので、特に、中・高・大の連携について、まず中学からお話を始めさせていただきたいと思います。

最初は、中学生の国語の学力についてです。

これは平成19年度の全国学力調査の結果からですけれども、全国の正答率を、皆さんに当てていただきたいと思うのですが、全国学力調査で書き取りの問題で、「友達に本をカす」。読みで「草木が繁茂している」。3番目、「手紙の正しい後付け」というのは、これは何月何日で、だれだれ一同、だれだれ先生へという、その三つの項目をどの順番で出すかと。そして4点目、「ロボットと共存する未来社会に対する自分の意見を書きなさい」（詳細別紙）とありますが、これは資料の37から始まる問題です。ご存じの方もいらっしゃることは重々分かっておりますが、37ページから、中学生の前田さんが「総合的な学習の時間」でロボットについて調べたことを発表する原稿【A】と、そのときに使用する表【B】という形で、これだけの長さの文章が載っていて、そしてB問題というBの表が39ページにあります。41ページに1番、2番という形で選択の問題があり、最後に、3番としてある、この問題についてです。「Aの文章中にロボットと共存する未来社会とありますが、あなたはどのような未来社会を想像しますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい」とありますね。条件は、人間とロボットとの未来の関係についてのあなたの考えを書くこと、人間とロボットとの未来を考える、【B】の表で示されているロボットの「性能・特徴」のいずれかに触れることです。Bの特徴ですから、地震の被災地において活動できるロボットと、これはチラシを渡すロボットと、10名までの人の顔を識別してコミュニケーションをとれるロボットです。

先生方、もし何かメモできるものをお持ちでしたら、レジュメの横に全国の正答率は、書き取り、読み、「手紙」の正しい後付け、自分の意見、それぞれ何％ぐらいだと思われますか。全国の中学校3年生です。メモできるもの等お持ちでなければ、頭の中で大体これぐらいかなというようにお考えいただければ結構です。

これはなかなか当たりませんから、もしよろしければ周りのどなたか近くの方と、後ろを振り返っていただいても構いませんので、何％ぐらいかなとか、よければお話ししてくださって結構です。どうですか。

お話がしにくい方もいらっしゃるようなので、正答パーセントを言いますね。まず書き取りは58.2％が正解です。読みの「繁茂」は30.3％。手紙の正しい後付け選びは55％。ロボットと共存する未来社会の記述問題というのは、どれぐらいだと思われますか。大ざっぱに言いますから、手を挙げてください。まず真ん中から行きます。50％ぐらいだと思われる方。大ざっぱに2段階というか、それよりももっと下で25％ぐらいという先生。75％以上と思われる方。全国の正答率は、この4番目の問題が75.9％です。

【質問者】

すみません。質問です。正答というのは、何ですか。

【奥村哲也氏】
この条件に合っていれば、ということです。
【質問者】
条件に合っていれば、何を書いても正解なわけですか。
【奥村哲也氏】
そうです。
いいでしょうか。ではその次です。これは波紋が起こりましたね。岐阜県と全国との間に大きな差があるものについてそれぞれ挙げてみました。大ざっぱに言うと、先程の1番、2番というのは、これは基礎力です。書き取りと読みという形。それと、新学習指導要領では活用と呼ばれておりますけれども、こういった自分の意見を書く問題です。岐阜県と全国には、私としてはかなり有意差があると思えるのですが、全体ではそんな大きな有意差は出ていないと報告ではなっているのです。県ごとに見ていくとかなり違いがあると私は思っています。
では、この基礎力と活用と、岐阜県の中学生はどちらが得意だとお思いでしょうか。これはどちらかですから、それじゃあ基礎力の方が得意じゃないかと思われる方、どうぞ手を挙げてください。
ありがとうございました。残った方は活用の方ということです。一応数字を申し上げておきますと、岐阜県の方は、書き取りの方は正答率が47.7％。全国が58.1なので、岐阜県の方が低い、読みも23.4％、ロボットの自分の意見は81.9％です。以上の、活用していく力がついているという結果が出ています。なお、平成19年度のものですから、今は高校1年生なのです。
また、中学校の先生方の意識というものを聞いた結果も、それぞれ文科省のホームページの方に載っております。中学校3年生の国語の授業で、「目的や相手に応じて話したり聞いたりする、そういうことを意識して指導したか」という問いに対して、これは指導したという側です。こっちが岐阜です。黄色が全国ですので、「話す、聞く」、それから「書く」の方も「大変よく指導した」と答えたパーセントがこういった差になっていますね。「読む」というところの差はそれほどなくて、漢字語句の方は、全国の方が、指導したという形で先生方の回答結果が返ってきています。先生方の意識というのが子供たちの学力にもあらわれているということになります。
それから、岐阜の子供たちの特徴を表している「無回答率」の差に注目していただきたいと思います。「無回答率」とは、要するに答えられない、空欄です。先程の「カす」という問題の結果についてみると、こちら側が無回答ですから、全国の方が無回答率は高い。ロボットに関しても、後付けもそうなのですが、わずかですけど、岐阜の子は、無回答率が低い。ということは、岐阜の中学生というのは真面目に書いて、しっかりやろうという意識は強いのです。
それから、平均の正答率という比較も、平均でどれぐらいかというと、岐阜県は19,413人と全国約100万人のデータを比べたのですが、主として知識を問う問題の差、主として活用と呼んでいるB問題との差というのですが、正答率のパーセンテージですけれども、これだけ違うとなると、まとめるとかなり成果を上げているのではないかと言えます。
次に、中学校の指導というのは、グループを特徴としていて、班で動いて、仲間で高めあう活動が中心となっています。先程話がありましたが、高校になるとどうしても講義形式の授業をある程度しなければいけないのですが、中学では講義形式中心ではありません。生徒の活動が中心になっています。だから、学級、クラスのまとまりというのが非常に密接な結びつきを持っていて、国語でいえば、「話すこと･聞くこと」･「書くこと」の面で非常に工夫されていて、全国的に見てもかなりの成果を上げている。そういう国語の指導がなされていると思います。
今度は高校です。高校の基本データですけれども、平成19年度の学校数で全日制の公立学校が63、私立が16、公立定時制が3、高校の在学者数がどれぐらいかというと、58,419人。中学校の在学者数が62,921人で、進学率は、大体ご存じと思いますが、97.6％。先程の小山

先生のお話にも「今大学は大学全入の時代だ」と、「すごい荒波をかぶっているのではない、どうすればいいんだ」という話もありましたが、高校は既に荒波を、私の見方では2回ほどかぶっております。一つは平成元年ごろの第2次ベビーブームです。これは書いてありませんけど、大学の合格率がそれまで大体70％ぐらいだったのが、63％にまで落ちました。あのころ本当にクラスがどんどん増えていって、この子頑張っているよねと思っていても大学になかなか合格できないという、いわゆる高校にとっては非常に頭が痛い事態が第2次ベビーブームの時にありました。それが第1波です。それから第2のインパクトになりますが、特に先ほど所先生の話でもありましたが、学校5日制などによって授業数が減っていった。これは平成11年の学習指導要領の改訂に伴う部分でもあるのですが、その部分を現場で消化していく上で非常に困難を伴うことがありました。この点は既に話があったということで、簡単に話しておきますが、その対策の中で、平日7時間目の授業や土曜日の補習などが行われ始めました。あるいは45分授業とか65分授業とか、なお本当に切実な部分を申し上げますと、岐阜県ではありませんが、46分授業とか、47分授業を実施している例があるのです。どういうことかといったら、1分でも2分でも違うというのです。高校側というのはそこまでぎりぎり追い詰められ、何とかしようという意識があらわれていたとお考えになっていただきたい。これは涙ぐましい努力でしょう。無意味だと思われるかもしれませんけど、そこにこだわるという、そういうケースが出てくるのです。

そういった中で、高校側の指導で特徴的なところは、生徒が主体的に学習できる目標設定とか、とにかく分かる授業にしたい、国語に関して言うと、講義形式一辺倒の授業からなるべく脱却したいという努力をし始めました。中学校の指導をうまく吸い上げて、その上に立って努力していきたいということが明確化してきたのです。

次に、高校のカリキュラム例ですが、最初に挙げた、国語総合というのが中学校とつながりの大きい科目です。国語総合か国語表現かどちらかを必履修するのです。1例を挙げますと、1年生のときに国語総合という科目を週に5時間ぐらいやって、2年のときに現代文、古典と分かれていきます。3年次にも現代文、それから古典、古典講読というのを文系のみにやるというカリキュラム例がこれです。

それから、1例だけではなく、国語の単位数の抽出を表しました。過去10年間ぐらいある模擬試験を、1年生の7月、2年生の7月、3年生の7月という形で受けていて成績が追跡できる高校の国語の単位数を集めました。全部で19校あるのです。19校ありますので、いわゆる普通科の中で進学を中心に考えている学校で、進学のトップクラスばかりではありません。そういう学校で一体どういうカリキュラムを編成しているかといったら、国語総合は標準単位数が4単位。4単位というと、週4時間、年間で140時間実施するのですけれども、1単位ぐらい増えているのです。先程の教科の分捕り合戦の中である話しかもしれませんが、それぞれ頑張って増やしているわけです。現代文の方でも文系は増やしているところが多いし、古典についても同様に贈単していますね。この古典講読については非開講が4割です。ですから、開講していない学校があります。他教科との選択をしている学校が4割ぐらいあります。国語表現については、これは開講しているところは少ないです。

以上が国語の単位数の抽出ですが、今抽出した学校の平均は、過去10年間ほとんど全国偏差値等は動いておりません。よく学力が低くなったと言いますが、全国偏差値は下がっていません。中学校もよくやっている、高校もそんなに差が見られないということが言えます。

その次の高校の指導の特徴は進路指導です。先程もありましたが、低学年からの進路指導がされています。1年生のうちに進路を決めるなんてめちゃくちゃだという反対意見もありますが、これをやろうとしている学校も増えてきつつあります。それから、行ける大学から行きたい大学への転換を目指す流れもあります。ですから、うちの大学はこういう生徒が欲しいなあというのが高校側にまで伝わってくると、先生は進路指導がしやすいのです。うちの大学はこ

ういう学生が欲しくて、こういうふうにして社会に送り出しているなんていう情報があると、ああそうかと送り出せるのです、自信を持ってね。ここはこういう大学だからということがはっきりしていないと、教師側は「どうしようかなあ」と言われたら、「しようがないなあ。そうしたらこういう大学がいいのではないかなあ」と、自信を持って勧められないのです。文理選択を１年次の秋に実施する学校もあります。ですから、早い時点で子供たちに、もしくは、高校の先生たちに、大学の実情とか、こういう生徒が欲しいということを分かってもらうということが大切です。ちょっと赤字で書いておきましたが、中学校への訪問学校説明会を高校はしています。先程所先生が少し言われたのですが、高校はすべての校区の中学校に行きます。教務主任とか、教頭先生とかが出かけていって、うちの高校はこうですよ。だから、こういうところに特徴があって、部活動も一生懸命やっていますよという説明をします。それで分かってもらうのです。そういった形で高校紹介を積極的にしています。

それから、高校の指導その３ですが、受験指導も特色があります。補習というのは、できる子を引き上げる。補充というのはできない子を引き上げるための授業です。休みには宿題が出ます。受験直前にも受験の指導をします。個別指導で小論文の添削など、本当にいろんな形で指導があります。

今６番目まで画面に出してしまいましたけど、先程から所先生の話にも小山先生の話にもありましたが、実はこの受験指導の内容というのは、一括りで言うと、いわゆる学習塾や予備校の内容です。学習塾でやっていたドリル学習のようなことを高校が行っているところもかなりあるということです。だから、こんなにいっぱい時間的な制約がある中でいろんなことをやり、なおかつ成果を上げるためには、短期間に、センター試験の分厚い問題集をやりというような形になるわけです。知識を統合したり、あるいは高校の教員が学問に対して夢を語ったり、脱線する、先程ありましたね、座禅などの時間が失われていきましたように思います。

そういった面は、さらに考えなければいけない部分を高校側も持っているわけですけれども、ここに書いておきましたが、初期指導も実は受験指導の中に入っているのです。これはどういうことかといったら、入ったばかりの生徒に、英語は絶対こうしなくてはだめだよ、古典はこうしなくてはだめだよ、予習が必要なのはこれだよ、何で勉強しなくてはいけないのという、中学生を高校生に変えるための指導を組織ぐるみで行います。そういうところがいわゆる進学校の中ではかなり増えております。中には、早い段階で合宿を行う学校もあると聞きます。

それから、今度は新しい学習指導要領を受けてこれからどういうふうに変わっていくかという点なのですが、小学校では日常生活に必要な国語の能力の基礎、中学校では社会生活に必要な国語の能力の基礎、だんだん広がっていきますが、高校としては社会人として必要な国語の能力の基礎をつけていくという段階を意識していくようになっております。

それから、国語に関係する部分を申し上げますと、小学校から著名な和歌、物語、漢文などの古典に触れさせるということ、中学校についても、言語の歴史や、作品の時代的・文化的背景とも関連づける指導が必要だということ、各教科において言語活動を重視して、レポート作成や論述といった言語活動をしていくべきだということが出てきています。

次に小学校の授業時間数を上げてみました。これが年間の国語の授業時間数です。新しい方と旧の方と、こちらの方の差が書いてあります。５年は英語が入ってくることもありまして、減っていて、６年は変わらないのですけれども、低学年で国語の授業時間が増えています。35というと、週１時間は確実に増えています。

中学校の場合、２年生で増えますが、中学校自体はそれほどではありません。ここに小・中の計を出しましたが、119 時間、より国語に時間を割く形になっています。

これから国語の学力はよい方向に変わっていくだろうという予測はできるのですが、ここで一つ、このグラフは何でしょう。平成 19 年度岐阜県の統計課が出しています。男女合わせた数です。この 10 年間大きな変化は見られません。男女に分けると、少し男性の方のパーセン

トが上がります。

【参加者】

このグラフは県内・県外の大学進学者数ですか。

【奥村哲也氏】

はい、そうです。大学進学者の数を出したものなのです。県外へ 7,485 人進学していて、県内には 1,525 人という形になります。

また、学部別に見てみると、ちょっとこれは小さくて見にくいのですけれども、これが法･政･商・経・国際関係の男子です。1,924 人の 36.8％。理工がこれぐらい。文・哲・教育・社会関係がこれくらい。農学、以下こうなっています。今度はもう一つ、女子の方がこうなっていたということです。これは県内･県外問わずに見ています。文･哲･教育･社会関係、法･政･商･経、看護・栄養、家政、体育、理工、農学、その他というように分かれています。そこを考えてみると、県外へ流れ出ている高校生が非常に多く、これほどの子たちがまだまだ大学で学びたいと思っているので、ぜひここでお願いをしておきたいのは、岐阜大学、私も学ばせてもらったところですので、私大変好きです。先生方、岐阜大学のよさを高校の現場に届くような形で、ぜひアイデア、お力を絞っていただいて、岐阜県で教えたすばらしい子供たちを岐阜県の方で育てていって、できれば最後まで育ててあげていける形で連携がとれればというように思っております。

話があちらこちらへ飛んで、大変申し訳ありませんでしたが、本当に、今までよりも一層中･高･大の緊密な連携をとれていけるように願っております。どうもありがとうございました。(拍手)

【司　会】

ありがとうございました。

弓削先生お願いします。

【質問者】

何点か質問させていただきたいんですけれど、1 点ごとにお答えいただけますでしょうか。

先程学力の問題というのがありまして、岐阜県の場合、中学校も高等学校もそんなに学力は全国的に見て落ちていない、悪くはないと。むしろ全国的には高い方だというようなことでした。それから所先生のお話ですと、随分いろんなことを勉強して、知識量というのは豊富なんだというようなお話もあったかと思います。

ただ、他県と比べてとか、そういう相対的な問題ではなくて、やはり一年一年、学生を見ていますと学力が落ちてきているように思えて仕方がないんです。ＰＩＳＡの読解力調査では、一番新しいもので、ＯＥＣＤの参加国の 15 位ということですよね。それはちょうどＯＥＣＤの平均ぐらいの点数ということだそうですけれど、そういうことも考えますと、やはり日本の学生の学力というのはそんなに高くはないのではないかという気がするんです。

特に国語の問題でいいますと、やはり若い人を見ていると、語彙が貧弱である、言葉を知らない、言葉の使い方を知らない。それから、今国語の 3 領域の話がちらっと出てきましたけれども、読む力が非常に劣っている。生徒に読ませていると授業にならないということもあるのかもしれませんけれど、とにかく読めない、読み解けない、読んでも意味がわからないということ。それから書けないというのも問題だと思うのですけれど、さきほどの全国学力調査では割と応用力のようなものはいいんだということでしたけれど、でもやっぱり若い人たちを見ていると、最近「ＫＹ」という言葉がはやっていますけれど、空気が読めない。文章のコンテキストが分からない。あるいは文章から場面や状況が再現できない。あるいは、ある事柄とある事柄との関連性がつけられない。そういう力が物すごく不足しているような気がするんです。

一番の問題は、大学にとっては、書くことができないと文系の学問は仕方がないと思うのです。それで私たちは仕方なく「レポートの書き方」というものを作ったのですけれど、ああい

うものも利用できない。あれを見て利用できる学生はまだいいけれども、そのレベルにまでも行かないという学生がいっぱいいるような気がするのです。それは中学校、高等学校、小学校もそうですけれども、教科書を見ていますと、書くことについての教育が系統的でなくて、継続的も反復性もない。そういう教育の問題なのではないかという気がするのですけれど、まずその点についていかがでしょうか。

【奥村哲也氏】

小、中、それから高という形で、書くことの指導の継続性ということは確かにまだまだ薄い部分だと思います。高校では、先程ありました国語総合という科目の中で書くことを年間30時間ぐらい行うようにというような形での記載はあります。だから、週1時間ぐらいは書くことの指導に当てなさいというようにはなっております。いろいろな工夫はされておりますが、確かに系統立てているかというと、そういう問題ではありません。

なお、基礎・基本をしっかりしようというのが今度の新学習指導要領でも打ち出されていますので、岐阜県の方でもそういったところでさらに改善が図られて、基礎力の方をというような意識の方が、先生方がこれからより持たせるような方向に行くと思います。書くことの系統的な指導については、今ありました高校の歴史の方では、入試の方でどうしても小論文指導で個別添削をやってくださいという生徒に対しては行っておりますけれども、2年生、3年生になるに従って、いわゆる学校単位ですべての生徒に書かせることが増えるかというようなことでもないということで、今のところは個別対応で行っています。ですから、理系の生徒さんなんかでも、全く書けないような形でセンター試験を中心にしてくぐり抜けてしまったという生徒さんもいるように思います。そこら辺はどうしても時間数削減のことも、いろんな要素もあって、現段階では本当に難しい問題だと思います。

【質問者】

2点目なんですが、いわゆるリメディアル教育のことなのですが、ゆとり教育というふうなことも言われて、学校5日制になりまして、小学校でやるべきものが中学校に送られ、中学校でやるべきものが高等学校へ送られという形になって、高校でやるべきものが大学に送られてきている。けれども、私たちは従来どおりのことをやっている。そうすると、入ってきた学生と私たちの大学教育の間には、やり残されたものというのが必ずあるわけです。そういうことからいうと、やはりリメディアル、その部分を補うものを大学でやらないと、あるいは大学のレベルをもう少し高等学校段階まで落としてやらないと無理なのかなという気もするのですけれど、そういう点、先生はリメディアル教育が大学で必要なのか、それから必要だとしたら、どのような形でやるのが国語の場合有効なのか、先生のお考えをお願いします。

【奥村哲也氏】

先程少し初期指導の方でお話をしましたけれども、高校側も好きで初期指導を始めたわけじゃなくて、やっぱり学力が落ちているよねという話は出ていました。だから、どうしたらいいかといったら、やっぱり予習の仕方とか、塾に入っている子の中でもいろいろで、学習塾もあるのですけど、学習塾で逆に予習をしなくなっている子もいたりして、いろんな状態のいろんな子がいるので、これはまずいぞということで初期指導が始まりました。それはその高校の中で、やれと言われたことではなくて、必要性を感じて、これはだめなのだというようで始めたわけです。それで、始めた内容が学習方法だったというのと、組織立ててやっていったというようなことをご参考にされて、もしも大学の先生の中で、リメディアル教育はやっぱり必要だ、これはだめだなというようになったら、だめな部分、一例で言うと、レポートの書き方とか、本当にだめだよねということになってくれば、それについては、例えば授業の中で、どなたかがチームを組んで、確実に次の年度にそれが送れるような形で実施されていけば、それは大変有効な形ですべての先生方が助かるのではないかなというように思います。

レポートの書き方がどうしても必要だと。ただ、それを例えば授業の中の一環とか、どうし

てもとらなければならないようなこまの一つにしていただくとか、私、大学のシラバスの細かい中身までは分かりませんし、そこまでは申し上げられませんけれども、とにかくチームを組む必要があると思ったら、代替できる何か方策を考えるというようなところを柱にしていかれたらどうかと思います。

【質問者】

大変参考になりました。

3点目なのですが、ちょっと時間がありませんので、もっといろいろお聞きしたいことがあるのですけれど。きょうは入学試験の問題がいろいろ出てまいりました。社会についても2次試験で課してほしいというようなこともありました。国語について言いますと、実は国語を課しているのは教育学部と医学部の看護学科だけなのです。その教育学部も選択です。そういう現行の入試のあり方なのですけれども、どういう形がいいのか、高等学校側から見て、高等学校の国語の先生の視点から見て、どういう入試が一番高等学校の教育を実り豊かなものにすることになるのかということをお伺いしたいんです。

それから、新しい指導要領の問題が出ていました。もうすぐ公示されまして、平成25年度から実施という形になるのだと思いますけれど、古典の重視とか、いろいろあるのですけれど、一番の基本は読み書き重視の方向性が出てくるだろうというように思っているのです。これは2004年の2月に文化審議会が、「これからの時代に求められる国語力について」という答申を出していまして、ほとんどその方向性に沿っているのです。だから、この2004年の文化審議会の答申というのは非常に大きかったなと思っているのですけれど、読むことと関連づけた書くことの重視なのです。その2004年の答申では、指導の重点は読む･書くにあると明確に言っているのです。そうしますと、新しい指導要領になりますと、高等学校の指導内容というのが随分変わってくるのだと思いますけれど、それと関連づけて、ではうちの入試はどうすべきかと。これまで2次試験では、教育学部の場合、さまざまな課題文を読んで論述するという試験をしていましたけれども、近くそれが変わってしまいますが、またそういう形が必要になってくるのかなという気もするのですが、そういう入試の課題という点で何かご提言をいただけたらと思います。

【奥村哲也氏】

大学の入試というのは、先程こちらの話でもありましたが、本当に高校の現場にすごく強い影響力を持っています。また同時に、それは大学に入ってくる学生の質も左右してしまう。当然のことですけれども、そういうように思いますので、先程センター試験のことなんか中心に上がっておりました。センター試験はそれでよいと思うんですが、個別試験に関しては、例えば書く力が少ない学生が多いと思われるのでしたら、きちんと書かせるような形の入試をされた方が、やはりこちらの受ける方を指導していく側はそれを中心にしていくというようになると思います。ただし、真ん中ごろで私が申し上げましたけれども、私どもはもっと骨太の指導を本来はしていきたいんですが、そこまでの余裕がない。長い文章だろうと、どんな文章だろうと、ドーンと読んで、バーンと分かって、言われた形で書けるというのが一番理想的なんですが、それをやっていると、今度は高校側は大学に生徒を送り出せなくなる。そういうジレンマの中で入試対策を行っているということになります。ですから、大学の学生さんの質に応じて入試もお考えになられた方がいいかと。少なくとも、私国語ですので、こちらの大学の入試問題なんかを見せていただくと、きちんと書かせるところを作っていらっしゃる、記述中心というところは大変あるなあというように思っています。指導していく側としては大変ありがたい形だと思います。採点等に非常にご苦労されるかと思っていますけれども、できたらそういった形で今後も続けていっていただけたらと思います。

【質問者】

ありがとうございました。

【司　会】
ほかにちょっとお聞きしたい点がございましたら、時間は予定していた時間よりも少し延びてしまっておりますけれども、特に最初の基調講演について、少しご質問なさりたい方もお見えになったのではないかと思いますが、あるいは２番目の歴史の話についても。
国語関係でちょっと私お聞きしたいのですが、これは一応大垣北高校などを前提にして、つまり、国公立大学へ来る、うちの大学へ来るという高校生をちょっと頭に描きながらお答えいただきたいのですけれど、読書をなさるかどうかということですね、高校生たちが。
それから、あとは歴史やあるいは地理の先生もそうですけれども、課題を与えて、宿題とかですね、学生たちはやる余裕があるのかないのか。やらないとか、そもそもなかなか宿題を与えないのか。恐らく地理・歴史だとそういう余裕はあまりないのかもしれませんけれども。
【奥村哲也氏】
宿題は出す学校が多いです。非常に多いです。中には、週末課題や休日課題という形で、一覧表にして出される高校もあります。
【司　会】
それは国語に関してですか。
【奥村哲也氏】
いや、全教科です。やはりそういう受験シフトという形、大学入試対策というところが非常に大きなウエートになるということです。
【司　会】
読書は。
【奥村哲也氏】
読書については、これは中学校の指導でも既にありましたけれども、小山先生のお話の中でありましたが、現行の場合、中学校はピンポイントで選んできて調べ学習をさせるという形の展開が多いので、読書も、好きな子は読んでいます。でも、一般的には読みません。読まない傾向が強くなっております。読んでいる子はすごく読んでいます。
【司　会】
先生方、もう少し何か発言を。
【質問者】
本来、国語教育は、私が小さい頃、小学生と中学生、高校もそうでしたけれども、感想文を書きなさいというのが出ていますね。これはほかの国ではやっていないことだと指摘されているわけです。つまり、本や文献を読んで、事実を正確に把握して、キーワードをとらえて、重要なフレーズとかを踏まえて、何が書いてあるかということを要約する。正確に要約することが行われて、初めてそれを展開するわけですよね。展開する前のところを抜かして感想文を書きなさいという、極めて高度な、新聞で毎週日曜日には読書欄がありますけれども、それなりの第一線で活躍している人たちがあの中で書いていますけれども、非常に難しいと思います。そういうことが大学へ入ってきた場合、レポートを書けないということと関係しているのかどうか、それを少し教えてほしいのですけど。
【奥村哲也氏】
確かに情緒的にとらえてしまう側面というのはあります。それも読む文章がどちらかといったら小説などに偏りやすいという傾向はあると思います。ただ、例えば人間は論理だけで動いているわけではありませんので、全く人の気持ちが分からなくてもよいかというと、そういうわけでもありません。私は、使い分けるというのでしょうか、それを題材によって指導していく必要はあると考えています。使い分けができないままであったら、確かに情緒に引きずられやすい。日本のセンター試験、あるいは入試の中でも、小説という部分が非常に評価できるという意見と、あれは国際的に見ると情緒的な背景が多過ぎて、やや異例であるという意見もあ

るという報告もあると伺っております。賛否が分かれるところですが、私としては、やはり文章を読んで人の気持ちが分かるというところも軽視したくないという気持ちでおります。ですから、気がついたところでそれをしないといけないと思います。ただ、あまりにも読書感想文というのが情緒的な側面に流れている部分はあります。弊害等も現状では幾つかあると思います。

【質問者】

地域科学部の法律の近藤ですけれども、今回の社会科学系の部会の主任としてアンケートをまとめたということで、最後の所先生の方からのリメディアル教育について、人文のところの、必要なものであればやるべきだという主張でございましたけれども、社会の方も、極めて必要な世界史やあるいは日本史や、それこそ最初に小山先生が問題にされた地理の分野でのというのは、非常に重大な問題だというように考えているわけですけれども、アンケートの中では、あえてそういうところでリメディアルという形で高校の知識の足りないところを補足するというやり方では不十分であるというように考えて、その面で、確かにやるべきであるとすれば、社会科学の入門のような、そういう分野の、社会科部会ですと世界史、あるいは日本史、そういうような歴史的な認識と、それから地理やあるいは現社のような横の広がりというものや、政治・経済のような内部の構造的なもの、そういうものを十分に統合できるような力、それを根本に遡って、小澤先生が一つの空間と一つの流れ、まことにいい言葉をおっしゃいましたけれども、そういう形で統合的にとらえられるような力を構築するということが、私たちにとっては非常に重要な課題だというように考えているところであります。そういうのをぜひとも学内の中で今後培っていかなければいけないというように考えてもいいということです。

【司　会】

ほかに、アンケートをまとめられた坂本先生はおられますか。一言お願いします。

【質問者】

質問までは全然想定していなかったものですから、特にアンケートをまとめて、個人的な感想ではないのですが、今お話を伺って１点だけ。

大学の先生と高校の先生との意識の差異があるのかなというのを少し感じました。今後どうしていくのかというのが大きな問題だと思うのですが、アンケートをまとめていて、今日のお話を伺っての感想は、ずれがあるのかなあと。そのずれはどういった形で埋めていくのかというのが今後の課題として残っているんだなあということを認識したというのが意見です。

【質問者】

野村と申します。人文部会の主任で、このアンケートをまとめさせていただきました。

それで、大変長丁場にわたりましたけれども、今日はお三方の先生のお話を聞いて非常に意義深いものがあったなあというように思います。普段から薄々気づいていることですけれども、今日こういう３時間以上の話の中で、改めて問題がはっきり浮き彫りになったかなあというように私自身は思います。

大きく分けて、一つは学習指導要領の問題です。要するに文部科学省が決めていること、それが例えば科目の選択のことであったり、あるいは週５日制のことだったり、要するに国が決めている枠内で僕らはどうするのかということで、当然と言えば当然なんですが、それが一つ目。

それから、二つ目は入試だと思います。入試科目の問題。これは大学側の問題で、我々が考えるべきであると。しかし、これもそう簡単にはいかない問題がありますけれども、入試科目の問題が一つはあります。

それから三つ目は、例えば学習到達度の問題だと思うのです。要するに高校ではどこまでやって、それを大学の我々が、ではここからバトンを受け取ってやるのだというところ、これが今日の大きなテーマだと思うのです。高校と大学の連携の問題があったのですが、今日お話しい

ただいたことを出発点にして、今後この部分、学習到達度の問題を高校の先生方と我々大学、特に初年度教育に携わっている教養教育推進センターに関与している先生方との間で議論を深めて、このあたり、いろんな制約がある中で、我々もきっちり議論を深めないといけないなと。この部分に関しては、我々はかなり工夫ができるのではないかというように思いました。

それで、特に今、教養教育推進センターというのは、全学共通科目というのをやっているのですけれども、この中でもリメディアルの問題です。所先生はやるべきだとおっしゃったのですが、現状ではいろんな問題があります。教員数の問題だとか、あるいは我々専門科目を持ちつつ、こういう全学の教養教育もやらなければいけないと、そういう非常に厳しい現実があったりして、なかなか努力はしているのですが、十分にはできていない。だけど、結局僕らの目標というのは、やっぱりいい学生を育てるとか、学習能力を持った学生、あるいは教養を身につけて、いろんな問題に対しても解決能力を持つようないい学生を育てることなので、ここを中心にしながら今後の大学の先生方は、協力していかにうまい解決策を今後見出すことができるかというように思いました。ちょっとまとめ的な話になりましたけれども、これを機会に我々も次なる働きかけをしていくべきだと思いました。

【司　会】

ありがとうございます。ほかにどうしても聞いておきたいことがありましたら。ございませんか。

本当に今、野村先生がおっしゃったように、長い時間、3人の先生にはお忙しい中、また小山先生などは腰痛で、そういう厳しい中で来ていただいて、有意義なお話をしていただいてありがとうございました。皆様もお忙しい中、参加していただいてありがとうございました。また、最後に野村先生もおっしゃったのですが、今後検討する課題として幾つかご提案がありましたので、何らかの形で形あるものにして、教養教育を人文・社会科系統の専門授業も含めましてレベルアップできたらいいと思った次第でございます。

最後に小澤先生から、閉会の挨拶をお願いします。

【小澤副センター長】

3時間半にわたりまして、教養教育推進センターのＦＤ研究会にご活発なご議論、ありがとうございました。今、最後に近藤先生、あるいは野村先生がおっしゃいましたように、このＦＤ研究会はこれで終わりというような性格のものではありません。前回の自然系のものもかなり大きなステップを踏み出しておりまして、工学部の領域で裏実験というようなところまで踏み込んだ大きな進展を見せています。この人文・社会科系もこれで終わりではなくて、さらに議論を深めて、我々なりにまた新たなものを作っていければと思っております。

3時間半にわたって活発な議論ありがとうございました。これで閉会にさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

「平成 20 年度 第 1 回教養教育推進センターＦＤ研究会アンケート調査票」の参加者感想等

No	1. 提題「岐阜大学教養教育の現状」	基調講演「高等学校の社会科教育」	2.「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」	3. ＦＤ研究会全体の内容、その他自由記述
1	大学の教養教育のレベルを下げるのではなく、高大をつなぐ学生の能力を高めることに向けた議論の重要さを感じている。	一つの科目をめぐって多面的に高等学校の現状を知ることが出来た。また、科目の教育と大学での教養教育をつなぐ視点について考えさせられた。	高等学校の実状を率直に踏み込んで聞くことが出来た。その中でも教養的なもの、問題解決につながるような指導の現状がよく分かり、興味深かった。	高校の現状について、現在指導されている先生の個人的な見解を含めた話などを聞く機会はありがたい。同様の趣旨でもう数回こうした機会を持ち続けられれば、得るところが大きいと考える。
2	学生の学力低下は深刻ですが、絶望するほどではないと思います。「必要ならばやらなければいけない」重い言葉でした。	大学受検の影響力の大きさが分かりました。私は現代社会を受講した世代ですが、授業内容が暗くてとても嫌いな科目でした。世界史や日本史は大好きでしたので、社会科は楽しかったのですが、高校１年生の時に地理を習っておけばと思いました。	二次試験は重要だと思います。私の受験した大学は理系でしたが、国語も二次に必要でしたので古典も勉強しました。現代文は訳がよく分からなかったです。書くことと議論することは教育しないといけないことですね。	勉強になりました。高校も大変なことが理解できました。私の出身校は全くもってほったらかしでしたので、少しうらやましく思いました。
3	学生が「教養」を大学で学ぶことの意義を感じていない（専門科目のみが大学の勉強と考えている）ことが落ち着いたように思う。	高校の時間割からは見えない状況が理解できた。		
4		具体的かつざっくばらんな問題提起とビビットな現状分析で大変興味深かった。人選が良かったと思う。	所先生・・・最良の人選だったと思う。高校の歴史の先生の良質な授業のありようがよく分かったし、問題提起も納得がいった。大学への提言は大学側として今後も引き続きＦＤで検討すべきだと思う。	これだけの優れた講師陣が集まった場合は、ディスカッションでも講師の方たち相互に検討し、また会場ともコミュニケーションする場となれば、ＦＤとして極めて充実した実質的なものとなると思う。
5		学習指導要領と大学の入試がいかに高校のカリキュラムに圧力をかけているかがよく分かった。		
6		具体的な授業のあり方について話を聞くことができて、大学入試のあり方、教育の本質を考えさせられた。社会の移り変わり、科学技術の発展とともに私達人間の、具体的にいえばもっと若い児童、生徒の興味の持ち方、知るということ、学ぶということ、生きるということの本質の理解が変質しているのだということをしっかり認識して教育の再生ということを考えていかなければならないのかなあという印象を強くもった。		これから入試問題を考えるというところに結び付けていかなければならないように思いました。ＦＤ研究会の延長として必要ではないでしょうか。３時間というのは長すぎるので、２時間くらいにしてほしいです。
7	地理の現状は昨年の自然科学系科目と類似した状況にあることを知ってびっくりした次第。	日本史の話を聞いてやはり大学共通一次試験の害を知った。かといって岐阜大学で今からセンター試験の割合を減らし、独自で社会の問題を作る現状にもない数学でさえ岐阜大学は危機に瀕している。進路指導が低学年（1 年生）から行われていることを知り、工学部は考えねばならないのかと思った。		
8		社会科教育の現状を初めて認識しました。特に「地理」の教育に問題がいろいろあることが分かりました。	科目を選択する社会科の教育には、大学入試との関連でいろいろと問題があることが理解できました。一方、国語については、そんなに問題点がないように思われました。	語学（英語）教育についても高校の現状を取り上げて頂ければ幸いです。
9				教育学部の教員です。本日は、県教委との連携事業である 12 年目研修を終日担当しています。その途中で参加しました。ＦＤ等を年間行事予定に組み込んで、年度当初に予定していただけると無理なく参加できます。ご検討ください。

No	1．提題「岐阜大学教養教育の現状」	基調講演「高等学校の社会科教育」	2.「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」	3．ＦＤ研究会全体の内容、その他自由記述
10				好奇心の涵養を。理系離れと言われて久しいが、文型でも論理的思考力の低下や、推論法が身についていないなどの問題がある。おそらく通底したものであって、一つの要因としては、学問を学ぶ動機付けとなる「好奇心」が失われているのではないか。特に「好奇心」が大きな比重を占める理系でのダメージが大きく、文系では他の要素の比重が多いので、比較的ダメージが小さくすんでいるにすぎないのだろう。本来なら高校までで「好奇心」を養っておくべきだが、それが出来ていないのであれば、教養段階で大いに養うべきだろう。一つの目標として、全学的にテーマ化してもよいのではないか。また、理系の先生方が教養教育に参加しやすくなるのではないか。
11	教養教育に関心の薄い方々に聞いていただきたいと思いました。	発表者の発表方法（声、スライド資料等）が非常に分かりやすく良かったです。「岐大の文系進学者で地理を高校で履修した学生はゼロである」という指摘にはドキッとしました。地理について大変よく理解できた反面、社会科全体への言及が無かったことが惜しまれます。基調講演としてはそのような視点があっても良かったのではと思います。今回の場合は第二部の日本史のケースとあわせて聞けたので、充実していました。	日本史の発表では、後半の実例（鎖国についての授業例）が、説得力がありました。第二部では”実状”すなわち実際どのような教育が行われているかという報告を期待していたので、このような報告は参考になりました。国語については、実例報告というより概論であったのでいまひとつ問題の核心に触れられなかった印象を持ちました。発表者は岐阜の中高の国語教育はなかなか良いという趣旨で発表されましたが、具体的に教科書等示していただけると有難かったです。しかし、「岐大はもっと高校に宣伝・アピールしてほしい」という言葉は重く受け止めなければならないと思いました。個人的には、世田谷区の日本語特区について意見をお聞きしたかったです。	今回高校での教育に携わる先生方の話を聞いて、大学教員の認識とだいぶ差があると感じました。大学教育では学生に「基礎的知識が無い」「文章が書けない」と言っていますが、高校の先生方によると、入試のために語彙のような知識は詰め込んでいる（日本史）、書く授業を行っている（国語）ということなので、このギャップは何なのかと考え込みました。今後ＦＤで高大連携のトピックを続けるのでしたら、学習指導要領について取り上げていただきたいです。また金沢工業大学の例についてもお聞きしてみたいです。
12	前回の自然系科目を受け継ぐ形での提題は適切であったと思う。	高等学校社会科の科目構成がよく分かった点はよかった。内容がやや地理に偏りすぎたか？	所先生の講演は、現場での努力の状況がよく分かり、また高校側から見た大学及びその入試への要求が明確に指示されて大変参考になった。	先回の自然系科目のＦＤの時にも感じたことだが、結局諸問題の根源は文科省の指導要領にあると思われる。文科省の人間も良かれと思って改革をするのだろうが、もっと現場の意見を尊重し、なるべく干渉を控えるようにすべきである。これでほとんどの問題は解決の糸口が見つかるはずである。そうは言うものの、制約の中で我々も何かしなければならない。その中の一つは、入試制度をより良い方向へ改善していくことであろう。今一つは、今回のテーマに沿って言うなら、人文・社会系科目の内容についての吟味であろう。どのような科目に学生は興味を持ち、どのようなことを知りたがっているのか。これを教員側とのやりとりにより煮詰めていくことが今後の課題の一つとなろう。

No	1．提題「岐阜大学教養教育の現状」	基調講演「高等学校の社会科教育」	2.「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」	3．ＦＤ研究会全体の内容、その他自由記述
13	レポート作成力の向上は関心あるテーマである。形式、内容、文体、語選定等、国語的要素に加え、節（タイトル）の書式設定、例文、グラフ、資料の配置（見易さ）など、今日の社会の話ではないがハイブリッドなレポート作成力が必要との認識は共有している。ＷＧでも作り、対処すべき問題であることはすでに広く認識されていると思うが今回作成したレポートガイドを足がかりとして、もっと具体的指導法、資料作成を行うべきだと考える。	正直なところ分野として限定された話題で、あまり関心を持てなかった。なぜ「地理」を解体し、世界史の前提科目としないのか。現代社会で学ぶべき内容が多いのであれば、すでに高校での役割を終えた科目となってはいないだろうか。そのような本質的問題にふたをして、地理を守るべしとの話には客観性を欠く印象を持たざるを得なかった。個人的に地理は好きだが、「地理」として切り取られた科目に高校そして実生活でも活性化の道はないと感じた。	所氏の話はもう少し突っ込んだ議論がほしかった。奥村氏の話はさすが国語の先生という印象を強く抱いた。両氏とも大学教員として意外に知らない、自分の高校時代と違う部分を発見できた。	個別科目に関するＦＤは、講演者・討論者が個別科目に限定されない視野で話してこそ、全体に有益である。このようなテーマでＦＤを行うのであれば、講演者・討論者にその事をきちんとお願いしてほしい。そうでなければ、強制参加的にしないでほしい。
14	大学としてどのような人間を育てるか、ということから教養教育でどのような授業を行うかが決まるのではないか。実際には各授業者の裁量に任されることが多く、大学としての目標→各教員→授業内容のラインにズレが生じているのではないか。確かに学生に力がないことは事実だが、大学に入れた以上、鍛えることをもっと強力に推進していくことを考える時期に来ていると思う。学生に「教養教育は不要」と思わせないよう、内容を検討することが必要で、そのためには担当する教員が「片手間には出来ない」という意識を持つことが大切である。	話の内容がこのＦＤ研の方向性と合っていないように感じる。高校の授業の実態から大学までどういうことをすべきかという橋渡しなら分かるが。数字データの羅列であまり参考にならない。大学の共通教育への示唆があればと考える。	高校での様子の実態が生々しく語られ、そのことを通して生徒がどのような授業を受けてきたのかがよく分かった。そのような生徒が入学してくるということは、大学での授業を受ける態度へも影響を受けていると思われる。テーマ討論とはどういう形式ですか？二名の方がお話されて、それについてフロアとのディスカッションがあると思っていましたが、そうではないようでした。司会者は質問者の論点を絞って、時間を有効に使うようにしてください。	高校での現状を踏まえて大学の教養教育を考えていこうとする方向性は評価できる。しかし、教養教育を真に改革していくためには、各教員の授業内容に切り込み、それを検討していくことなしにはありえないと思う。教養教育についての全学的なコンセンサス→授業内容の設定→教員の選定→授業内容の検討という一連のステップが必要である。
15	問題に書かれている問題点は自然科学でも同様の問題が存在する。即ち、科学的思考の欠如が多くの学生に見られる。細切れの知識のみをある程度持つ高校生の層が入学しているのであろう。したがって「どうして？」とまず嘆くのではなく、「科学的思考方法を知らない、身についていない」ことを前提にした取り組みが必要と考える。例えば「～入門」などの必修化も検討すべきかもしれない。	前回の理系の場合でもそうであったが、講演者の思い入れが強いためか、現状の問題、それに対する打開が見えて来ない。前回は現役の教員、教委職員であったが、今回は「大学」教員であるが故に第一項提題に見られる問題の打開は絶望的とも考えられる。		昨年、今回と二回のＦＤに出席したが、講師陣の選抜を根本的に考え直すべきである。何ら打開策が見えてこない。講師個人の「思い入れ」の強調、公開に付き合わされるのは御免である。
16	高校教育では多様な教育をして大学に生徒を送り込んでほしいが現実としては学業失調（栄養失調のもじりです）の学生が増えています。理系という立場から見ても、正しく文章を書く、基本的な知識は持っていてほしいところです。教養科目として担当の先生の専門を生かしながらこうした基本的な教育も出来るように先生方に意識を持って望んで頂くしか質を高めることは望めないのではないかと思います。	教育カリキュラムにより生徒の学習機会を損なわれてしまう現在のシステムを残念に思います。何にでも接しないと興味を持てないのが人間です。私は最初世界史を選んでおりましたが、高３になって日本史に乗り換えました。世界史に出てくるコンスタンチノープル、イスタンブールなどの地名が地理が苦手であった私の興味を減じてしまい、逆に身近な日本の地名に興味が出てきたためです。地理の苦手意識がなければ世界史を守って浪人せずにすんだかも知れません。	社会科の各教科の内容量の多さが学部側にとっても教える側にとってもネックになっているようです。化学Ⅰ、Ⅱというように、教える内容（各時代の量）を分けて教えるシステムがあるとよいと感じました。	自分が共通教育を担当している部屋で受講して、ＴＶモニターはあまり意味が無いと感じました。（中央ぐらいならセンターのスクリーンで十分、右側二台目モニター（No. ３らしい）はぼけて見にくい。）こうした環境もたまにチェックして頂けるとありがたいです。
17		地理に限定した話が多かった。社会科の全体像を説明してほしいと感じた。しかし、説明が明確で分かり易かった。社会科の科目が多すぎる気がする。もう少し整理すべき？	入試の内容を改革する必要があると強く感じる。センター試験は、基本的には高等学校の教育目標や理念に合わせるべきだと思う。	大学がいかに対応するかは難しい問題ではあるが、入口は実態から、出口は目標から、具体策を考えるしかないと思う。
18	問題点の多くは、一大学では取り組むには大きすぎる。			

No	1．提題「岐阜大学教養教育の現状」	基調講演「高等学校の社会科教育」	2.「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」	3．ＦＤ研究会全体の内容、その他自由記述
19				各発表者の話は丁寧で分かりやすいが、発表時間はそれぞれもっと短くてよいと思う。（10 分から 15 分程度）残りの時間を意見交換、議論に使った方が有益。高校・大学の関連がもっとも重要なテーマ、議論なので、そこまで議論できなかったのが残念。次回に期待します。各科目の学習到達目標を設定することが重要だと感じました。
20	1．提題「岐阜大学の教養教育の現状」について （およびＦＤ研究会全体に関わる意見として、まとめて回答する） 「問題」の５において、「『歴史を一つの流れ』として捕らえることができず、一つ一つの事象を『ブチ切れ』にしか捕らえることができない」ことが、「問題」として掲げられている。そして、この前提は、今回のＦＤ研究会全体においても、共有されており、それ自体を疑問視する声は皆無であったとも言えよう。しかし、果たしてこれは、是正されるべき「問題」なのであろうか。本学の教養教育において歴史学の科目を担当する者として、（基本的には個人的見解ではあるが）こうした前提には強く違和感を感じた。 　そもそも、「歴史を一つの流れ」としてとらえることは、「歴史認識」と呼ばれるカテゴリーに属する営みである。そして、その「歴史認識」は、個々人の教養や全人格にもとづいて形成されるものである。そのため、人間的にも教養面でも発展途上の高校生の段階において、「歴史認識」と呼べるものが形成されているとはとても言い難い。もしも「歴史を一つの流れ」としてとらえることができていると主張する高校生がいるとするならば、その高校生は、他者の「歴史認識」に基づいて、その説明を丸暗記しているに過ぎない。その他者は、高校教師であったり、教科書の執筆者であったり、さらには予備校や受験参考書で身につける受験テクニックであったりする。いずれにせよ、他者が「歴史を一つの流れ」として説明していることを丸暗記しているのに過ぎないのである。むしろ、そのように他者の「歴史認識」を何の疑いもなく内面化していることこそ、問題視されなければならないと考える。 　以上のように、高等学校段階での歴史教育においては、そもそも「歴史を一つの流れ」としてとらえる能力は、要求していない。そうした能力は、むしろ、大学における教養教育の成果として、身につけるべきものなのである。 　では、現状において、学生が不足している面は何であろうか。それは、歴史に関する基本的な知識である。高等学校においてそうした知識が教授されていることを前提として、大学において、とくに人文社会系の教養教育を教授しているのである。具体的には、「フランス革命」と呼ばれる 10 年間にも及ぶ動乱において、どのようなことがあったのかというような知識は、教養教育の前提とされている。人権に関する授業の中で、もしも「人権宣言」とは何かも知らない学生がいた場合、その点から説明を始めなければならず、そうしたことをしていたら、時間がどれほどあっても足りることはない。つまり、基本的な知識を身につけていることが、大学教育の前提なのである。 　以上のように、今回のＦＤにおいては、「点」と「点」をつなぎ合わせる「線」を描く能力が欠けていることが問題視されていた。しかし、実際には、そうした「線」を描く能力は、大学の教養教育の中で身につけるものであり、むしろ「点」に関する知識そのものがかけていることこそが、問題なのであると考えられる。			

2008 年 8 月 27 日

平成 20 年度 第 1 回教養教育推進センターＦＤ研究会
アンケート調査票

本日は何かとお忙しい中、参加いただき厚くお礼申し上げます。
ついては、今後の教養教育推進センターのＦＤ活動に役立てる意味を含めまして、感想等をお聞かせ願います。

アンケート回収箱へ入れて下さい。

【提出できなかった方は、９月４日（木）までに全学共通教育事務室へ送付願います。】

以下の項目について記入願います。

１．提題「岐阜大学の教養教育の現状」について

基調講演「高等学校の社会科教育」について

（裏面あり）

2008 年 8 月 27 日

２．第２部のテーマ討論「高等学校教育の実情と大学教育に期待するもの」について

３．ＦＤ研究会全体の内容、その他、教養教育（全学共通教育）全般に関し、要望・意見等を自由にお書きください。

〈ご協力ありがとうございました。〉

今回のディアロゴスは、先に行われたＦＤ研究会で報告された、人文・社会系に関わっての「高等学校教育と大学教育の現状とそのあり方」というテーマでまとめさせていただきました。

これは前回の「自然系科目」でのＦＤ研究会の続編となるようなものでしたが、「高校側の実情を理解した上で大学の教育のあり方を考えよう」という教養教育推進センターの基本姿勢には多くの教員のご賛同をいただけたようでした。

ただ、実際的に一つの方向を見い出すにはあまりに問題の根が深いために、すぐにどうこうと足を踏み出せるようなものではないことは良く承知しており、こうした試みを繰り返す中で少しずつ改善への道が探れればと考えております。

その中で、参加していただいた教員の意見・感想として、「大学としてどのような人間を育てようとするか」ということをしっかり考えておかなければ、教養教育の授業も各授業者の裁量にまかされてしまうだけで、「大学としての目標・各教員・授業内容」のラインにずれが生じてしまうであろう、というご指摘がありました。これは数年前から教養教育推進センターが執行部や各学部に投げかけ、実際「合宿ＦＤ研究会」のテーマともさせていただいたものですが、やはり一番重要な問題であると考えられ、教養教育推進センターは今後ともこうした意識をより強く持って行きたいと考えております。センターとしては、すでに各学部代表からなる企画運営委員会に働きかけ、そうした議論を活発化させる方向をとりつつあります。

その中で、ＦＤ研究会でいただいた貴重なご意見を一つ一つ検討していく作業に入りたいと考えております。勿論、それ以外にも様々な形でいただいたご意見を検討していくつもりでおりますので、いつでも気がついたご意見を教養教育センター事務室までお届けいただけたら幸いに思います。宜しくお願いいたします。

お願いと同時にあとがきに代えさせていただきます。

岐阜大学教養教育推進センター　副センター長　小　澤　克　彦

表紙　ソクラテス

紀元前５世紀、ギリシャに生まれたソクラテスは「人が人として生きる意味」を史上初めて自覚的・意識的・方法的に問うた「哲学の祖」として知られる人です。実を言うと、本格的な「学問」というのはこのソクラテスの問いから生じていったのであり、それは「人が生きていることの意味」を問うことからさらに「人がここに生きている世界」への問いとなっていったからです。私たち人間は「この世界に生きている」からです。私たちが、何が対象であれ「疑問を持ち、追求し、学ぶ」というのも本来はそうした意味がありました。「学ぶ」ということはただ単に私たちの衣食住の欲望を満たすための手段を探すためだけではありませんでした。ところが近代以降の科学はそうした「欲望の充足のための手段」とされていく傾向が強まりました。これはこれで人間の生物的な欲求を満たすものとして意味はありますけれど、人間はそれだけで生きているわけではないはずです。私たちが生きているのにどんな意味があるのかを問うことは、「人が人らしく生きる」ために必然的なことだと言えます。「本当の学問」を取り戻したいです。

岐阜大学教養教育推進センター広報誌「ディアロゴス」第 14 号

発行
岐阜大学教養教育推進センター

編集
教養教育広報・FD 専門委員会
〒501-1193　岐阜市柳戸 1 番 1
TEL. 058-293-2178　FAX 058-293-3020